



水無月の夕立



舞夜じよんぬ

朝の小雨は給食時間までにやんだ。水たまりにはさっぱりした青空が映っていた。窓ガラスに滴っていた水滴が乾き、白っぽく跡を残している。

一年生から預かってきた書類に目を通し、上総は軽く机の上でまとめた。先週行われた『一年学年集会』の報告書類だった。

「立村くん、どうなるかと思ってひやひやしてたでしょ」

窓を両手で押し開けながら、清坂美里が上総に声をかけた。

二年生の評議委員は、みな上総に仕事を押し付けて帰ってしまった。自分でそうさせるように仕組んだようなものだった。最後は一人で帰りたかった。なのに、同じ二年D組の女子評議委員である清坂が最後まで残ってくれたのはありがたい反面、落ち着かないものがあった。

「そうだな、最後は杉本がうまくまとめてくれたからよかったけどさ。今年の一年生は難しいって本条先輩も話していたし」

「なんであんなに一年生って男子と女子、仲が悪いんだろうね。信じられない」

「俺たちの代まで、異常なほど仲良すぎただけかもしれない」

美里の言う通りだった。

その年入学してきた連中はなにかかしらあると、評議委員同士いがみ合っていた。

上総からすれば、どうしてそこで譲ってやらないのか、どうして親切にしてやれないのかが不思議でならなかった。

プリントを預かって、朝の会で発表する時すらも、お互いに仕事を押し付けあうのはよくあること。

男子と女子が露骨に分裂するだけならまだしも、一人の女子評議委員に面倒な仕事を押し付けて、あとは自分らだけさっさと帰るとは、言語道断の行為に思えた。

今回の一年学年集会も、ほとんど案を考え実行したのは、その女子評議委員だけだった。

もちろんひとりだけでできるわけもなく、二、三年同士が相談しあい、うまく回るように手はずを整えたものだった。

「杉本さんがよくやったよね。クイズ大会の問題とか、資料とか、手回しとか、一年生から人材集めなくちゃいけなかったでしょ。立村くんも大変だったと思うんだよね」

「もう少し今の一年がな、自分から動いてくれたら。杉本ひとりに負担がかかりすぎてるよ」

「でもね、正直なところいうと、杉本さんももう少し、男子とうまく話ができればいいのにな、というのはあるよ。女子から見てね。どうしてああ、もう少し柔らかく男子に頼めないのかな。あんたが無能だと言わんばかりのやり方だったら、みなやりたがらないよ」

上総は同意しながらもう一度、書類をめくった。

「確かに。もう少し、要領がわかってればな。あれだけ頭がいいんだから、うまく手回しをしてやれば、もっと楽だろうに。つくづく、俺たちの代っていろんな点で恵まれていたと思う」

「ほんと、いい奴が揃っててよかったよね。立村くんはひとりでいろいろやっていたと思ってるだろうけど、私とかも手伝っていたんだからね」

「わかってる。感謝してます」

美里の顔を見ないで、上総はさりげなくささやいた。

夏服の襟もとにさりげなく猫のブローチをつけている。落ちそうなのか、片手で触れている。肩に届いたおかつ髪を揺らす。

「本当に、感謝してくれてるのかなあ」

「信じられなかったか？」

「だって、立村くんいつもひとりでなんでも背負い込んでしまうからね。クラスの行事とか、去年の学校祭とか、冬休みの『忠臣蔵』演劇ビデオ作りとか。本当は言いたいこと、いっぱいあったんだろうなあ、とは思っていたけど私もどうしていいかわからなかったんだよ。前から言っているけど、もし何か手伝って欲しいんだったら、ちゃんと言ってよね。今の一年と違って、うちの代の評議委員は、いい奴ばかりなんだから」

「いつもすみません」

丁寧語で答えた。

「本条先輩には来週の木曜までに提出すればいいと言われているから、あとでまとめたものを見せるよ。二年評議同士は味方につけたいからさ」

「数字使うところとかない？計算とか」

計算や数学が苦手な上総の弱いところをついてきた。

「あとで、検算もお願いします。清坂氏」

窓を閉めながら、美里はピースサインを送ってきた。

「まかせておきなさいって」

初夏とはいえ、梅雨のない青湊の気候のせいか、蒸し暑さは感じなかった。雨が上がればあとは、風がちょうど良いやわらかさで吹き抜け、しゃらしゃらと揺れる葉音が聞こえていた。

ほとんどの男子は半そでのワイシャツで通っている中、上総は布帛の、薄いジャケットを羽織って通っていた。

ブレザーでは暑苦しい。かといって腕を出しているとすぐに身体が冷えて具合悪くなってしまう。

ことに学校の中ではクーラーが完全整備されているので、気温差が激しかった。

「立村くん、いつも思うんだけど、その格好、暑くない？」

美里は、羽織りものを着ている上総をいぶかしげに見ながら尋ねた。前から上総の着てくる服について、妙に関心を抱いている様子だった。

これだけ洋服についてのチェックが厳しいのは女子でもめずらしい。

「自転車に乗っていたら風がぶつかってきて、すぐ冷えるから、ちょうどいいんだ」

「そうか、立村くん、時間かかるんだよね」

「本当に時間がかかるんだ」

帰る準備が整い、窓を閉め、上総は美里と一緒に教室を出ようとした。

次の日の、音楽試験について思い出した。

「あのさ、清坂氏、明日の一時間目、確かりコーダーの試験だったって言っていなかったか」
美里は立ち止まり、しばらく天井を見上げ人差し指であごをつついた。

「そういえば……言った言った」

「五人で、合奏するって聞いたような記憶があるんだけどさ、全くやってないよな」

アルト、テノール、ソプラノ、バスの四パートに分かれ、バロック形式の小曲を演奏する予定だった。今回は演奏とペーパーテストの比率が七対三という比率で評価されるということなのでクラスの連中も結構真剣に練習しているようだった。

「私もやってない」

「それで、リコーダー、貸してもらえるって聞いたんで、昨日音楽の先生から借りてきたんだ。ただ」

「ただ、どうしたの」

上総はこめかみを指で抑えながらつぶやいた。

「たぶん、D組の教室に忘れてきている」

総毛立って細かなチェックを行い、できるかぎりミスしないように心がけている上総もたまにこうやって抜けたところが出てきてしまい、いつも落ち込むことが多かった。几帳面に身ぎれいに、過ごしているつもりだけれども本当のところは、こんなもんだと、自分でもわかっていた。

美里がそういう上総の性格を見抜いているのかどうかはわからなかった。

「じゃあ戻ろうよ。今気付いてよかったじゃない。確か、立村くんのパートってテノールリコーダーだったよね」

「一人しかいないから間違ったら絶対、目立つし」

「気持ちはわかるな。私、アルトリコーダー二人組でよかった！」

気を遣ってくれているのだろうか。

一年前、入学式で羽飛貴史から『俺と同じ小学校の幼なじみ』という紹介で知り合った。たまたま座った前の席に貴史がいて、美里が声を掛けてきた。なりゆきもあって、学生食堂に行き、昼ごはんを食べたのがきっかけだった。

やはりなりゆきで上総と美里はD組の評議委員に選出され、お互い話す時間も長くなった。

授業中、委員会中、時には別の場所。

女子とそれほどおしゃべりする方ではない上総でも、美里には気兼ねなく『清坂氏』と呼びかけることができた。入学後一時期はやった、『女子を氏つきで呼ぶ』という遊びが廃れた後も、なんとなく上総は、美里にだけそう呼びかけることにしていた。意味はない。呼びやすいだけだ。

毎朝しゃべったり与太ネタを話したりする『仲良し』に近いのだろう。

現在の一年生が異様に男女の差を意識しているのに比べ、上総たちの代はみな、仲のいい奴はいい奴、悪い奴は悪い奴と割り切っているような感じがしていた。

相性の合う人合わない人がいる程度で、男女だからという意識はほとんどしていなかった。

貴史が言うには、

「あいつが男だったらすべて丸くおさまったんだろうけどな」

美里が言うには、

「あいつとしゃべっているのはおもしろいよ」

まさか中心グループの人気者たちと親友づきあいさせてもらえるとは思わなかった。

できるだけみんなにあわせていよう、浮かないようにしよう、そう気を遣いつづけた一年間。

気が付けば上総は、二年に上がってから無条件で、評議委員に選ばれていた。

「やっぱり、D組の仕切りは立村しかないだろ」

と、ほとんどの男子がうなづいてくれた。

一年以上経ち、クラスではいやなことそれなりにあった。

傷ついたこともたくさんあった。

もう、これで自分はおしまいだと泣きそうになったことも何度もあった。

そんな自分が、はずされることもなく二年連続評議委員に納まっていられるのは、おそらくこの二人のおかげだろう。

清坂美里には、心から感謝している。

言葉に嘘はなかった。

D組の教室に戻り、すぐに上総は机の中を確認した。

たいてい、使わない教科書などは置きっぱなしにして帰るものだった。音楽、保健体育、技術家庭、道徳などがそれに当たった。

見つかると先生たちからは厳しく叱られる。

教科書を取り上げられて、後で職員室に来るよう、命令される。

お説教付きで一発ひっぱたかれた後、教科書をかばんにつっこまれるのはざらだった。

——そんなことを言ってもかばんに入りきらないんだから、しかたないだろ。

二年D組内における、多くの主張だった。

幸い上総は、評議委員会の先輩達から隠しておくテクニックを教えてもらっていた。呼び出しをくらったことはなかった。

なんのことはない。手提げを用意して、運動靴入れのロッカーに置いておけばいい。目立たない形にしておけばいい。委員会が終わってからこっそり置いてくればいい。自転車で三十分近くもかかる品山の家まで、重たい荷物を持つのはごめんだった。

「立村くん、見つかった？」

「どこいったんだろう、変だな」

口では抑揚の無い返事をしているつもりだが、真剣にあせっていた。

ちゃんと借りてきたはずなのに。

まさか今度はなくしてしまったなんていわないだろうな。机の中に確かにしまったはずなん

だが。

「別のところに置いたんじゃないの？」

「かもしれない」

手提げバックの中に入れた記憶はなかった。

さらにいうなら借りものを靴の匂いがつきそうなロッカーに入れるような非常識なこともしないつもりだった。

「教室出るまではあったのね」

「そうだと、思う」

「掃除の時に落としたりとしても、拾うからわかるよね」

「うん、でもそれしか考えられないな」

机の出し入れをした際に、転がり落ちたか、その可能性しか思いつかなかった。かなりまずい。明日、なんでなくしたのかとか言われて怒られそう。頭を抱えたいのが本心。

でも美里がいる以上みっともないところは見せたくない。

「ね、立村くん、念のためロッカーも見てみなよ。もしかしたらってことあるかもよ。立村くんの机に入れておくと、また落ちてしまうってだれかが思ったかもよ」

「あることを切に祈る」

たかが音楽、と馬鹿にすることなかれ。なにせ青大附属においては、合唱コンクールの最優秀賞受賞クラスに『一泊二日クラス旅行』を賞品に用意するくらい、力の入った行事だった。そこまでいかなくとも歌のテストがある時は、一種異様なカラオケ大会と化するありさまだった。

企画は得意だが自ら演ずるのが苦手な上総としては、できるだけ避けたい行事のひとつでもあった。

ロッカーには鍵がついていなかった。

盗難防止に、というよりも、鍵をつけたら絶対に誰かがかぎを無くすのが目に見えているからだろう。

しかも、四人共同のものだ。

五十音順だから、「リ」行の上総は「は」行の貴史と一緒にあった。

すでにごちゃごちゃといろいろなものが混じっていた。

互いのものがわかりやすくなるように、大抵は手提げかビニール袋に覆われていた。

漫画本と、休み時間に使うボール一式。

バレーボールが入っている時もある。

上総が置いているのは、体育用の上履きと、習字のセット一式、あとはリコーダーくらい。几帳面にまとめて棚に並べて置いていた。

まさかこの中にあるとは思えない。

美里の勧めに従い、袋を開けてみた。

「あのさ、清坂氏、聞いていいか」

「なあに？」

「ロッカーの中にあるって、どうしてそう思った？」

「だって、立村くんは机の中に入れておいたんでしょ。で、そこになかったんでしょ。ということは、落ちたか拾われたか盗まれたかのどちらかでしょ」

「盗まれた、か」

「でも、学校のを盗んでなんになるって気もするのよね。最後の可能性として取っておくとしても、拾ったらどうするか。立村くんの机だってことはわかる だろうし、明日リコーダーの試験だってこと、思い出さるうから。しかも立村くんってば、テノールリコーダーじゃない。各グループ六人しかいなくて、今必要だってことを考えたら、立村くんに行き着くのは時間の問題だと思うな。私だったら、さっさとロッカーに入れておいて、知らん振りするけどね。ほら、また机の中に入れておいたらころころ転がってしまうかもしれないじゃない」

「お見事」

上総は、ケースの中に入っているリコーダーを掲げるようにして持ち、美里の方を向いた。

「しつこいようだけど、今日は本当に感謝してます」

今度こそはなくさないようかばんに押し込み、外を眺めた。

二年に進級してから、委員同士で班を組ませるやり方は行わなくなった。いつも同じ顔をつき合わせていたくないという、一部の委員から意見が出たためだった。持ち上がりの担任である菱本先生もあっさりその要求を飲み、学期の初め班編成を行うことになった。誰もが納得する方法として、くじ引きが採用された。評議委員には『班変えのくじ引き作り』という新しい仕事がまた増えた。

その結果、一学期中、上総は美里と貴史と別班にまわされることとなった。まあ、去年はずっと一緒だったし、クラスそのものは一緒なのだから、取り分けて淋しいということはない。班で一緒になった連中とも、それなりに仲良く付き合っている。

現在の班には、古川こずえがいる。隣の席だ。

本音を言うところの方が上総にとっては悩みの種だった。

仲が悪いというのではない。

それどころか、女子の中では話の合う、いい友達だと思っている。

しかし、毎朝『弟にしているような』際どい質問を投げかけるのはやめて欲しかった。

いきなり『あんた童貞？』と脈絡も無く投げかけられると、こちらはどう反応していいかわからない。おそらく日々、姉からの攻撃に耐えているであろうこずえの弟に上総はいつも同情していた。

話を聞いている限り、感覚がかなり自分と似た小学校六年生らしい。

少しだけ雲の色が重さを増していた。もくもくと聳え立つ雲が見えるようならば、必ず折りたたみ傘を持っていかなくてははいけない。

ロッカーには万が一のためにかさも入れてあった。ついでに持ち出すと、美里が目ざとく見つけてきょとんと尋ねた。

「こんないい天気なのに、雨降ると思う？」

「なんだか危ないよ。この雲はまずい。清坂氏の家までなら平気かもしれないけれど、俺の家になるとかなり遠いから、空が持つかどうかわからない」

どうせ、上総の住んでいる品山の方は天気が変わりやすいのだ。

二階の教室から眺める山々は、うっすら水色に浮かんでいた。かすかに雲が輝きを抑え、まだらに空気をすかしていた。山の色といえば、遠めで見る限り、水色だ。今にも消えそうな、はかない薄さだった。窓を閉める前に上総は、誰か校庭にいるのかどうかを確認した。

誰もいなかった。

遠くのグラウンドでかすかに、吹奏楽部の練習がもれ聞こえる程度だった。

「羽飛はいないみたいだな、もう帰ったか」

「委員会もやらないんだったら、もう少し部活をまじめにやればいいのにね。あいつ馬鹿ね。そうそう知ってる？ 貴史ね、一年生の女子から昨日、告白されちゃったらしいのよ。こずえが騒いでた」

あんなに上総に対してはしょうもないネタをかますくせに、肝心の羽飛貴史に対しては積極的になれない古川こずえ。あきれてしまう。

「古川さんももう少し、自分の心に素直になれって言いたくなるな」

「こずえは自分なりに素直でいるんじゃないの。まあ、私も知っている子だったけれど、どうかなあ、なにせ貴史の好みは『鈴蘭優』だから」

「羽飛のおかげでやっと覚えた」

芸能人やアイドルについてどうしようもなく疎く、一年のうちはちんぷんかんぷんだった。話をあわせるのに苦労したものだだった。

最近になってようやく少しずつわかるようになったものの顔を覚えるのがやっとだった。

「立村くん、貴史からは聞いてないの？」

「全然。男子同士ではあまり、そういう話、しないんだ」

心ならずも嘘をついてしまった。男子同士が集まる時、全くしないどころか、ほとんどの場合、ひそひそ声の話題になってしまうことが多い。

女子の前では絶対にいけない内容である。

さすがにクラスの女子について批評するなんてことは、めったにしない。

その代わりに、『鈴蘭優』などのアイドルをネタにして、胸の大きさやセクシーショット、どういふところにそそられるか、などを真剣に語り合っただけで最後に自分の抱えていることに行き着くという、良くあるパターンだった。

男子に幻想を持ってはいけない。幻滅の道まっしぐらだ。

口に出す気もない言葉を、心の中にしまいこんでおいた。

「ふうん、そうなんだ。立村くんはあまりアイドルのタイプがどうとか言わないよね」

「わからないからな。この前も古川さんにプロマイド、また、見せられたよ。適当に選んでおい

たけれど、最近の芸能人って顔が同じに見えるんだ」

「はは、それってわかるな」

「どうして羽飛は、テレビドラマなんかでちらっとしか出てこない鈴蘭優を、瞬時に発見できるのか、俺には理解できないよ。テレビを一緒に見ていると、とにかくおどろくよな」

「そうそう、貴史って、好きなものにはとにかく、チェックが早いよね！」

しばらく美里と羽飛貴史のことで盛り上がっていた。共通の友達だからというのものもあるだろう。

本当だったら、夕立が降る前に帰りたいかった。

美里の巧みな話術に乗せられたのが真相だった。話を聞いているだけでなく自分からも話題を出してしまえること。小学校時代の上総を知っている人が見たら、きっと驚くだろう。大抵の場合は様子をうかがって黙っていることが多かった。

「ふうん、アイドルとかでも好きなタイプっていないんだ」

「顔を見ればわかるだろうけれど、そうだな。いない」

「でもそれって、淋しいよね。別に結城先輩くらい熱中しろとは言わないけれど」

「あの人はすご過ぎるよ。この前本条先輩と高校に用事があって会ったけれど、前の日に例のアイドルグループコンサートに行くため、授業さぼったという話をしていた」

結城先輩とは、二学年上の評議委員長だった。

上総が入学した年の委員長で、熱狂的アイドルマニア、かつ女性アイドルグループの追っかけに情熱を燃やしていた。今でもその傾向は残っているらしい。何度か上総も、結城先輩の家に遊びに行ったが、部屋にはポスターが天井から床まで大量に敷き詰められていた。同じ部屋を見るなり、「あの部屋で生活するなんて、俺だったら気が狂う」

と言い放ったのは、現評議委員長の本条先輩である。

「そうなんだ。結城先輩くらいマニアックになるとちょっと怖いかもね。彼女作れよ可愛そうになって、女子の間ではさんざん言われてたよ。いないよね、そういう人」

「歴代評議委員長はみな、一癖ある人が多いよな。本条先輩の狂い方も少々怖いところがあるにしても」

本条先輩の女性遍歴は相当なものだった。

上総も何度か話を聞いたことある。教えてもらったこともある。たぶんほとんど事実なのだろう。

真似はできない。一日で二人の女子とデートするなんて器用なことできそうにない。

「なんで本条先輩、ああいうことしたがるんだろうな。黙っていてもいくらでも、付き合えるだろうに」

「本条先輩と付き合いがっている三年の先輩、きっといるだろうにね」

「よくわからないな」

上総はつぶやいた。

「付き合うってこと自体、よくわからない。無理しなくたっていいのにな」

「なぜなぜ？」

「気の合う友達がいればそれで十分だろうに、って思うんだけどな」

「ふうん、そうなんだ。立村くんはそういう感じなんだ。あのね、立村くん、今私たち、噂されてるって知ってた？」

「『私たち』って……か？」

指で自分と美里を交互に指した。

「うん、最近、しょっちゅうなんだけど、立村くんの方はどう？」

「確かによく言われるよ。でも、慣れているけれどさ」

「そうなんだ。で、そう聞かれた時って、どう答えてるの？」

「いや……嫌いじゃないって、そのくらいかな」

「そうなんだ」

ひょいと立ち上がり美里は窓辺を向いたまま上総に背を向けた。

一呼吸置いてから、くるっと振り向き、

「私も、立村くんみたいなタイプ、好みよ。付きあっちゃおうか」

上総は自分がどういう顔して答えたのか自信がなかった。

どくどくと心臓が鳴り響きはじめた。心臓の音が聞こえるのだけは、はっきりとつたわった。なんでこんなにうるさいのかわからなかった。

自分の身体がどう反応しているのかすら自分で押さえられなくて、いらだった。

机の上に片手を置き、やわらかい表情を必死に保ったまま、短く答えるのが精一杯だった。

「いいよ、清坂氏とだったら」

きっと美里には見破られていないだろう、そう願いながら。

音楽の試験は、グループごとに練習を行った後、一曲ずつ合奏し、即座に音楽教師が採点を下すという方式だった。

上総の入っていた班は演奏するのが一番最初だった。ちなみに美里は二番目、貴史は三番目だった。男女混合六グループに分かれている。

「じゃあ、音楽委員と評議委員、悪いけれど準備室からリコーダーを持ってきてもらえますか」

二十四人分のリコーダーを運ぶべく上総は美里と顔を見合わせ、席を立った。アルトリコーダーは自分で購入する決まりだが、ソプラノ、テノール、バスは学校ですでに用意されているものを使う。

練習の前には水道できちんと吹口を洗うのが約束だった。

つばを抜くために、終了間際には鳥の悲鳴に近い音を出す。

四人も人手はいらなさそうだった。すでに音楽委員はリコーダーを運び終わり、評議委員の手伝うことはないように見えた。

「もう、運ぶものってないよね」

美里が音楽委員に尋ねた。

「あるよ。音を録音するための、カセットレコーダー。二台必要だって。あとさ、テープだよ。全員のを録音して、後で全員分まとめて配ってくれるんだってさ。三十本持ってきてって言っていたよ」

リコーダーの重さでふらつきながら音楽委員は出て行った。

上総はまず、ラジカセらしきものがどこにあるかを探すことにした。

薄暗い中、ほとんど掃除もしていないとみえて綿ぼこりが舞い上がり、思わず咳き込んだ。楽器が狂っておかしくなるんでないだろうか、と思うくらい湿気のひどい部屋だった。

上を見上げ、棚をしらべ、アコーディオンやシンバルの陰に隠れていないか、美里とふたりで丁寧に調べた。

「探し物が得意な清坂氏ならば、だいたい嗅覚で気付くんじゃないか」

「犬じゃないんだから」

ばたばたと棚をいじっていた。扉をきっちりと閉めてくれたので、どのくらい時間が立っているのがわからなかった。

上総はようやく見つけたカセットレコーダーを引っ張り出し、ハンカチで埃を拭いた。

「使っていないよな、この状態って。持っていく方の身にもなってみろよ」

「服汚れるの、気にしてるの？」

「まさか、ただ、こういう埃っぽいところに長くいると、咽がおかしくなってしまうんだよな」

手を動かし続けていた。絶対に目をあわさずに話し続けていた。

背中では美里が動き回っているようすが感じ取ることができた。たぶん、テープ三十本を探しているのだろう。想像はしていた。

「あのね、立村くん」

「テープはここにはないよ。もう一方の棚じゃないか」

「ううん、みつかった。私の嗅覚で発見済み」

振り向くと、美里が真後ろで新品のカセットテープを籠にまとめて立っていた。表情は相変わらず、いたずらっぽそうな瞳が目立っていた。

「さすがだよな。昨日といい今日といい」

昨日、と口にしたとたん、美里と見詰め合っけてしまいすぐにそらしたくなつたのをこらえた。

いくらなんでも目を合わせないでいるっていうのは失礼だ、

「立村くん、あの、いいかな。ちょっと相談なんだけど」

「え？」

瞬間、雲がかかったように見えたのは気のせいだろう。

「昨日のことなんだけど、あのあと、誰かに話した？」

「あ、あのことか」

すぐに反応してしまった自分が情けなかった。上総は表情を崩さぬよう言葉少なめに答えた。

「いや、話してないよ」

「そうなんだ、話すようなことじゃないよね」

「悪いこと、するわけじゃないからさ」

「そうよね、悪いことなんて、してないよね。私たち」

私たち、という美里の言葉に、再び上総は戸惑った。

「それだったら私も、言わないでいるから。別に隠すことじゃないけれど、立村くんもあまりそういうこと言いたくないタイプかな、と思って」

「別に、俺はかまわないよ。あまり気にしないから」

「でも、話してないんでしょ。貴史にも誰にも。私にちょっかいだしてこなかったところみると、たぶん立村くん、内緒にしてくれたんだらうなあって、思っていたんだ」

「ひとりで決められることじゃないからな。清坂氏は、どうすればいい」

他人に下駄をあずける自分の優柔不断な性格。

つい上総はためらった。

——まるで、自分で物事を決められない奴みたいじゃないか。

どう振舞うべきか判断ができなかった。

「そうね……私だったら、しばらくは内緒にしておいてもいいな」

「それで、いいならそうするよ。わかった」

上総はしっかり目を見つめて、うなづいた。少しだけ安堵のため息がもれたのを、美里に気付かれないようにしたくて、ふたたび棚の方を向いた。

「じゃあ、教室に行こうか」

「うん、一緒に行こうね」

いつもだったら、荷物の少ない方がさっさと教室に向かう。この日は美里が上総を待っていていた。一緒に音楽室へ戻ることになるのは、めったにないことだった。なんとなく自然に思え

て上総も従った。

「教室に入る時、悪いけど扉を開けてもらえるか」

「もちろん、そうさせていただきます。私もラジカセ、半分持とうか」

「いいよ、なんだか、みな清坂氏に任せっぱなしのようで抵抗あるから」

少しゆっくりめに歩いていたのは気のせいだろう。

重たいラジカセを両手にぶら下げているゆえに走ることもできなかった。

美里はテープのたばをかごに入れて歩いている。

上総の目をしっかりと見て、楽しそうに笑っていた。

音楽室ではすでに、全員がリコーダーの練習にいそしんでいた。やかましい笛の音に耳をふさぎたくなった。

まだ準備ができていないこともあって、音楽教師も暇を持て余しているようだった。上総はラジカセ二台をグランドピアノの蓋に置いた。美里はかごのテープレコーダーを全員に配っていた。

「ありがとう。それにしてもずいぶん遅かったなあ。評議委員コンビ」

にやりと視線を向けてきた。

「早く呼びたかったら、音楽準備室の棚をなんとかしてください！ わかりずらいたらなかったよね、立村くん」

口は達者な美里が、さらっと言い返した。

言いたいことをきっぱり言うのに、なぜかいやみにならないし、先生も笑って聞いている。

どうしてだろうと、上総はうらやましく思っていた。自分が発言すると、なぜか教師一同はまじめな顔をしてくる。特に担任の菱本先生は、上総に対してきつい言葉を向けることが多い。たぶん嫌われているんだろう。

美里が言うには、

「単に立村くんのことを気にしてくれてるだけじゃないの？変な意味じゃないくて、ひいきされてるんだよ」

とのことだが。

さっさと自分の席についた。あれだけ騒いだのに結局一回くらいしか稽古できなかったテノールリコーダーを組み立てた。借りてきたリコーダーは、つなぎ目が堅くてはめるだけでもかなり苦労する。

継ぎ目を握り締め、うまく差し込むべく悪戦苦闘していると、バスリコーダーパートの南雲が寄ってきた。耳もとにささやいた。

「相変わらずだなあ、立村は。一体準備室で何してたんだよ」

「ラジカセを探していたんだよ。探すの大変だったんだ」

「違う違う、清坂さんとふたりっきりだったんだろ」

ぴんとこなかった。

「ひとりで全部持ってくる根性なかったからな」

「全く、とぼけちゃってるんだからなあ。立村は何気なく、うまいよな」

「だから何が」

「ポーカーフェイスですることしてるしな」

音楽準備室で長居しすぎたのがまずかったのだろう。ようやく気付いた。自分の鈍さにあきれた。きっとみな、想像をたくましくしているのだろう。最近のD組連中は、恋愛沙汰の話題にずいぶん敏感だ。一年の頃だったら全く気にしなかったようなことをチェックする。

もっとも南雲はさんざんな目にあつた奴である。

見かけはきざっぽく見える。そんな南雲には以前、別のクラスに彼女がいた。とりわけ美少女というわけでもないが、並んで違和感のない感じの子だった。

しかしいきなり心境の変化があつたらしくその女子と別れ、なぜかクラスの奈良岡彰子に告白してしまった。

奈良岡彰子が前の彼女以上にきれいな子だったら誰も驚かなかつただろう。確かに飾らない、性格としても気持ちいい女子だった。

だが、体型がぽっちゃり、を越えてかなりのビール腹タイプだった。面食いの男子だったら、一歩ひいてしまうタイプだろう。

しかし、本気で奈良岡に惚れた南雲は、理科実験室でアルコールランプを取りに行った際に告白してしまった。

かわいそうにタイミングが悪すぎた。同じD組の男子がその衝撃的な場面を目撃したのがまずかった。

話によると相当、恥ずかしくなるような言葉を吐いていたと聞く。

二人が戻ってくるまでの間に情報は流れ流れてD組始まって以来の大騒ぎと相成った。『理科実験室告白事件』として、当時の学級日誌にはひっそりと書き残されている。

「南雲、お前と一緒にするなよ。人は人、自分は自分だろ」

そのことに触れると、南雲も力抜いたような顔で、情けなさそうに笑った。

ばれた当時は開き直って堂々と

「そうだ、俺は奈良岡のことが好きだ！」

と言っただけ、奈良岡をすっかり困らせてしまった。そういう対象にされていること自体、奈良岡も想像していなかったようだった。

もっとも、単なる受け狙いではなく本気だったということが、二年D組男子の協力もあって奈良岡に通じ、今では公認のカップルとして和やかに過ごしている。

「まあ、立村、先輩として言っておくけどな」

バスリコーダーを加えながら南雲はささやいた。

「学校の中でしくじるののだけは、絶対、やめとけよ」

「了解」

それ以上は無視して、上総はふたたびリコーダーと格闘しはじめた。

たぶん美里が話していた『最近噂される』というのは、南雲のというような類のことなのだろう

。

こういうことだったら、上総も覚えがある。

一年の頃は貴史に散々からかわれ、どう言い返せばよいのかわからなかった。

「絶対、美里はお前のこと意識してるよな」

「お前はどうかんだよ」

「ま、悪い奴じゃないからさ」

「でも将来は怖いぞ。お前の性格だと尻に敷かれるな」

無表情のまま話を聞くことが多かったのもあって、上総はただ、

「羽飛、なぜ、そういう話題を俺に振る？」

と、尋ね返した。それが他の連中からは

「ポーカーフェイスを気取っている」

と言われることもあった。

「あまり女子のことを考えたことないから、よくわからない」

「普通に話していればいいのにな」

上総からすれば、自然な感覚で答えているつもりだった。

でも貴史はどうも言葉どおり受け止めてくれない様子だった。疲れることもしばしばだった。

「好きだったらお前から言っちゃえばいいのにな」

「俺からみたら、ばればれなのにな」

貴史の態度は親切の押し売りに思えるときも、しばしばあった。

美里とくっつけようとする懸命な態度が、なんとなく不自然に感じられた。

きっと上総のことを大切な友達だと思っていてくれるからだろう。それは純粹にありがたい。

——でも、こちらの考えていないことを先回りして準備する必要はないんじゃないか。羽飛。

『付き合う』という言葉が飛び交い始めたのは、二年に上がってからだろう。

それまでは誰も、言葉に出さずにアイドル歌手やタレントの話題で盛り上がっていた。自分の好きな女子が誰かを口にするなんて、考えたこともなかった。

アイドル歌手を隠れ蓑にして、似ているクラスメートのことを語ろうとする大馬鹿者もいたが、一発で見破られ、からかわれるはめになったのはいうまでもない。

上総も芸能界の情報には疎いこともあって、ただ話をあわせているだけだった。

だが二年に進級した頃から、それぞれが、自分の『お気に入り』を心のどこかに隠していることがうっすらと見えてきた。よそ見していても平気な英語の授業中、上総は気になる奴らの様子を、後ろの席からいろいろと観察してみたものだった。

授業中、先生の顔を無視して他の女子を、背中が突き抜けそうなほど見つめている奴がいる。かと思えば、手紙を書いて後ろへ送っている女子もいる。授業の最初の号令をかけていると、先生に頭を下げている間にじっと見つめている背中とか。

つい気を取られて、よく
「立村、暇なのはわかるがよそ見するな」
と叱られたものだった。

叱る方が別だろくに、と思いつつも、上総は何も言わず語らずのままでいた。

南雲の状況も早い段階でだいたい勘付いていた。

もともと奈良岡と仲が良かったのは確かだし、噂で前の彼女に『好きな子が出来た』という理由で別れたとも、直接聞いていた。なにせ同じ班だ。

だがその『好きな子』が奈良岡だとはなかなか決め付けられずにいた。

どちらかというと、羽飛貴史と清坂美里のように、親友のような感じなんじゃないだろうか。

上総としてはそう判断していた。第三者から見ても、顔が女子受けする南雲と、愛嬌はあるものの美人とはお世辞にも言えない奈良岡とは、見た目どうもつりあいが取れていないふうに見えた。

当然理科実験室での告白事件ではどぎもをぬかれた。

と同時に南雲を改めて見直した。

その後起こったクラス中の冷やかしムードも、結局は奈良岡を混乱させないためにということを中心に、南雲の心境を正確に伝えるべく行動し、無事収まった。

たかがクラスの色恋沙汰という無かれ。

表だっては言えないが、これも評議委員の『影』の仕事である。

青潟大学附属の校訓。

「誇り高い紳士であれ、淑女であれ」

D組の男子に関してのみ言えば、この意識はかなり浸透している、上総は確信していた。

クラス内のカップルは増えては減りと増殖していった。

結果の出た連中については、大体様子を見ていればわかるし楽しめるところもある。観察者としてはおもしろい。

しかしいったいどこでどう手続きをしているのか見当がつかなかった。南雲のようなわかりやすい告白を、どこでみなしているのだろう。教室か、もしくは部室か、委員会の帰りなのか。気が付けばいつのまにか、お付き合いらしい顔をしてたむろっている連中が増えていた。

——なにをすれば、付き合ったということになるのだろう？

玄関で待ち合わせしている男女二人組がいれば、たぶんそれも付き合っているのだろう。

ロビーで手をつないでいちゃいちゃしているのも、付き合っているのだろう。

本条先輩のようにどうどうと泊り込み、することしているのも、付き合いのひとつなのだろう。

付き合う、という言葉でふくらむものが多すぎた。昨日までは自分とは関係ない世界だと割り切っていたし、想像したこともなかった。

クラスの男子同士でしゃべっている時いきなり脈絡もなく

「立村、お前には清坂がいるんだろ」

と真顔で切り返されたこともある。判断できないパターンは多々あった。

「嫌いじゃないけれどそれとこれとは別だろう」

と、流すのが常だった。

ひゅうひゅう言われるのは、いやだった。『付き合い』、という言葉が気持悪かった。主義に合わなかった。

上総の目に、『付き合っている』友達は誰も美しく見えなかった。

しかしながら、昨日の段階で、『付き合っちゃおうか』という美里の言葉を受け入れてしまった自分が、今、ここにいる。

リコーダーを吹きながら、座っている。

ちらりと美里のいるグループを探してみた。相変わらずはしゃぎ声がやかましい。貴史が美里になにやらリコーダーを振り上げて威嚇している。

すぐにちゃんばらごっこ化している。いつものことだ。しゃれでやっているだけなので、すぐに収まった。

——付き合っている、ことになるんだよな。

親指で後ろの穴を抑え、微妙な音の違いを確認しながら、上総は『付き合う』という言葉をかみ締めていた。

自分の知らない響きのような気がした。

テストは無事終了し、使い終わったリコーダーを二十四本運び終えた。

音楽委員がほとんど片付けてくれたので、評議委員コンビの出番はない。ラジカセのみ、運んでいった上総に対して音楽委員はちらっと、

「相変わらずだなあ。二人ともな」

と言葉をかけ、去っていった。

「二人？なにが」

戻りながら上総は戸惑っていた。

「いったい、何が相変わらずなんだか」

隣にいた貴史につぶやくと、

「お前まだ気付いていないのかよ」

呆れ顔で頭を抱えられた。

「だってな、お前ら道具取りに行くのに、十分以上かけて戻ってくるなよな。音楽委員は先に帰ってきました、でも評議委員はふたりとも戻ってきません。なんででしょうって、そりゃ思うぞ」

「音楽準備室の棚を整理しない先生に文句を言ってくれよ」

「せめてひとりで持ってくるとかさ、しろよな」

「ラジカセ二台で両手がふさがっているっていうのに、テープの入ったかごをどうやって一人で持って来いって言うんだ。頭の上に載せろとでも言うのか」

ああいえばこう言い返すで貴史もうんざりしたのだろう。わざとらしくため息をつき、じろつとにらんだ。

「悪いけどさあ、立村。お前、『自業自得』って四字熟語知っているよな。覚悟しろよ。これから先」

「何を覚悟するってさ」

答えずに貴史は音楽室を出ていった。さっさと行きはしないで、追いつこうとする上総を扉の前で待っていてくれた。

大抵の日は、家で洗濯物を片付けたり、何も考えずに寝ていたり、外に出ることもなくおとなしくしている。

決して、次の日の予習をしたりとか、友達を呼んだりとか、そういうことはしない。

もちろんクラスの何人かは遊びにきてくれたりするし、駅前に出て遊んだりすることもあるけれども、なにせ品山の間人ゆえ、どこに行くにも遠い。かといって、近くで遊ぶのだけは避けたかった。

小学校時代の知り合いと顔を合わせるのはいやだった。

約束のない日曜日、上総はいつも部屋の中で過ごしていた。

「上総、起きてるか」

ドアの向こうから父の声がする。

日曜日なのに、めずらしく家にいるのはなぜだろう。

上総の記憶には、祝日遊びに連れて行ってもらったことがほとんど残っていない。

全くなかったわけではなさそうだった。かなり古い写真には、つまらなさそうな顔をして映っている遊園地でのスナップが残っている。楽しいと思ったことがないから、たぶん両親も好んで連れて行ったわけではないのだろう。

「起きてるけど」

「今日はどこも行かないのか」

「行かない」

短く答え、上総は父親が部屋に入ってくるのを迎えた。

机に向かっていれば何をしていても、まず勉強だと思ってくれるだろう。

教科書を開いていれば、カモフラージュも問題なし。

周りから『うり二つ』と言われるくらい、父と自分とは似ているらしい。

上総自身はそう考えたことがないのだが、母からもしぐさひとつに、

『上総はお父さんそっくりだから』

と言われつづけてきた。

どこが似ているのだろう。細い唇とか、痩せ型のからだつきとか、首の長いところとか、ありとあらゆるところが重なるのだそうだ。

「お前、身体の調子は大丈夫なのか」

「問題ないと思う」

父が上総に話し掛ける最初はいつも、体調の是非だった。だんだん夏気温に近づく頃、大抵上総は高熱を出して一週間くらい寝込む。本当に小さい頃からそうだった。

一年の六月、やはり夏風邪で倒れてしまったにもかかわらず、父は

「いつものことだ」

とばかりにほったらかして仕事に出かけてしまった。かえってそれの方が嬉しい部分もある反面、全快してからの家事を片付けるのに大変な思いをした。

今年はそれに懲り、前もって夏風邪対策を練っている。薬を準備しておき、ちょっとふらっときたらすぐにベットに横になる。具合悪いから、の一言でほとんどの言い訳が利く。

ただ、その時はかならず

「頼むから、お母さんには連絡をしないで」

と頼まなくてはならない。うっかり、別居している母に連絡を入れられたら、病人といえども心休まる間がない。

上総は数学の宿題をやっているふりをしながら父の方を見た。いかにも

「忙しいのに、一応親だし」

という顔をしてみせた。薄手の灰色開襟シャツをきちんと着ている格好は、まるで学校に行っているかのように見えたのだろう。

「誰か遊びにでもくるのか。学校の友達か誰か」

「来ないけれど」

「それならなぜ、もっとラフな格好をしないんだ」

「着たくないから」

ふうん、と上総を眺めた。普段から軽いジャケット風の洋服を好む上総の性格を、我が子ながら今ひとつ、理解できないでいるようだった。

「そういえば、母さんが来週、一泊二日で泊りにくると電話があった。久しぶりに家の掃除をしてやるから、と電話で話していたよ」

「別にいいのに」

——母さんか。

——冗談だろ。

——また何言われるかわからないよな。

——誰かの家に泊りに行こうかな。

「そうだ、この日に関しては、上総、友達の家泊りに行くのはあきらめろよ」

心を見透かされたようだった。

ため息が漏れ、あわてて顔を机に向けた。

「月に一度のお約束だからな。父さんも休みを取るから、おあいこだ」

憂鬱一色。

父も母もいる週末、自分もどこにもいけない。

——こんなうっとおしい土日が来週なのかよ。

「だから、母さんに見られてまずいものは、どこかに隠しておきなさい」

「そんなのないけど」

顔を上げずに上総は答えた。

いつ母が来ても問題ないように、掃除洗濯は神経質すぎるくらい気を使っているなんて、父には言えない。

きちんと季節の飾り物なども、母の残してくれた『歳時記ノート』を参考に、並べていることも。それこそ抜き打ちテストのようなものだった。

もし、ひとつでも整っていなかったら、何を言われるかわからない。

成績のことについてはあまりうるさく言われたいけれども、生活が荒れ果てていることだけは許されなかった。

——やっぱり今日は、家の中、必死で掃除しないとまずいってことだよな。

——本当はずっと横になっていたかったのにな。少し頭がぼおっとしてきているし。

「そういえば、最近どうしている？ あの、電話をくれた女の子は」

「別に、なんでもない」

「はきはきした、いい感じの子だな」

家に電話をくれる女子といえば、清坂美里しかいなかった。

評議委員会のからみもあって、確かにしょっちゅう連絡が入る。時にはつきあって長話をすることもあった。

でも、父が電話を受けたのは数回程度のはずだった。

上総は父のつつこみを無視することにして、シャープペンシルを走らせた。

いかにも、

「宿題をやっています」

というポーズを見せた。

「たまには外で遊びに行ったりしないのか」

「それどころじゃないから」

「宿題が大変なのか」

「そういうこと」

「数学か」

ようやく父も、上総の成績について気がかりなことを見つけたらしく、教科書を覗き込んできた。

迷惑だ。

早く部屋から出て行って欲しい。

そう念じるのだけれど、鈍感な父は気付いてくれなかった。

こういう雰囲気は上総はたまらなく苦手だった。

「どうなんだ、学校では勉強とか辛くないのか」

「数学以外は」

最近の上総は、自分の成績について開き直っていた。成績表を見せても、父は怒るわけでもないし、むしろ文化系科目の良さに驚いている様子だった。たぶん、上総の成績が、両極端なもの

だというのに戸惑っているのだろう。

一年の時に家庭訪問があり、その際に菱本先生からいろいろ助言されたらしい。くわしいことは聞いていないし、父も特に後から言わなかった。

ただ、

「お前は英語科に進んだ方がいいかもな……」

とつぶやかれた程度だった。

青大附高には英語科目カリキュラムが豊富な英語科という、クラスが用意されている。

「あまり無理にとは言わないが、英語以外の科目ももう少し、勉強した方がいいんじゃないか」

「している。出来ないだけ」

悔しいからそれしか答えなかった。

一応どころじゃない、ちゃんと他の科目を勉強しているところじゃないか。

——赤点続きだけどさ。

——数学の勉強しているつもりだっせ。

いかにも

「勉強中なので邪魔するな」

というオーラを撒き散らしたので、ようやく父も部屋を立ち去った。

あまり話すこともないし、上総も口が多いほうじゃなかった。

他の友達が「父親ってうざったい」「顔を見るのもいやだ」とこぼすのを聞いたたび、どうしてそんなに話をすることが多いのかが不思議でならなくなった。一応二人暮らしなのだから、それなりに話はするし、たまには注意されたりもする。でも、激しく言い合ったり、殴られたり、怒られたりとか、そういった生々しい経験はほとんどない。忘れていただけなのかもしれない。かえって気が楽だ。来週の『母、襲来』に向けてはいろいろと相談しなくてはならないこともあるし、男同士でなんとか乗り切らなくてはならないこともわかっている。

父がちらっと口にした言葉を、ふと思い出した。

「お母さんに見られてまずいものは、かくして置きなさい」

——まずいものか……。

上総は本棚から『フィツジェラルド』と書かれた文学全集の箱を取り出した。わけがわからないなりに、小学校六年までの間に読みきった本ばかりだ。

中でも『グレート・ギャツビー』は、ページに折れ目がついてしまったくらい、繰り返し読んだものだった。

中学に入って最初に図書館で調べたのは、『グレート・ギャツビー』の原書だった。アメリカ文学はどことなく、文体が乾ききっていて上総の好みではなかったけれども、この作品だけは別だった。何度読んでも、全く飽きなかった。

箱に収めておいたのは、三冊ばかりのハンディグラビア写真集だった。

数週間前、本条先輩からもらったものだった。

引き出しに、『グレート・ギャツビー』はいつでも取り出せるようにしまいこんでいる。

空いているから、しまいこんだだけ。

上総はぱらぱらとめくりしまおうとした。

とたん、気になった一ページがのぞき、広げなおした。

真っ白いスリップ姿の、大体年恰好は十七歳くらいだろうか。ショートカットの悲しげなまなざしをした、少女のアップだった。

初めて見た時から、このモデルには目が留まった。

机の上の問題集の上に、広げたまま置いた。父はいない。大丈夫だ。

一、二分程度だと思っていたけれど、時計では五分以上たっていた。

黙って身を硬くしたままじっと見入っていた。ただそれだけだった。

もちろん、夜、父の気配もなくて、あとは寝るだけという状況だったらどうしていたかは想像がついた。たぶん、衝動を押さえられなかっただろう。悔しいことだけど、自分の意志の弱さはよくわかっている。

上総は息を深く吸い込んでぱたんと本を閉じた。

ショートカットの哀しげな少女は姿を消した。

母の直感というか、嗅覚は、かなり鋭く、ちょっと隠し事をしただけですぐに見つけ出す。父のようにある程度黙っていてくれたらいいのだが、すぐに上総を攻めたてまくる。怖い。

まあ、父にも見られたくない本ではあるからして、どうにか処分しなくてはならないと思っていた。

まだ十時を回っていない。上総は居間に向かい、父が座っていないかを見渡した。

二人暮しだというのに豪華な居間だった。臙脂に黄色の幾何学模様を施したじゅうたんが敷き詰められていた。父母どちらの趣味かはわからない。ここにしか電話が置いてないのは不便きわまりなかった。自分専用の電話が本当は欲しいけれど、そうもいかない。

本をしまいこんだ後、暗記している電話番号をダイヤルした。

本条先輩の家だった。

「はい、本条です」

声は確かに本条先輩のものだった。ほっとして上総は名乗った。

「立村、どうした、今日も暇か」

「用事があるから電話かけたに決まっているでしょう。本条先輩、今、大丈夫ですか」

「ちょっとばかし眠い」

「また、ですか」

一年以上の付き合いで、本条先輩の女性遍歴はだいぶ見えてきた。周りで騒がれているほどに派手ではないにしても、することはきっちりしているという。現在付き合いしているのは、公立中学の三年生だという。さすがにどういう子かまでは聞かないにしても、しょっちゅう泊り込んでりしているのは確かのようにだった。

「また立村、勘違いしているのか。全く、お前も最近は」

言いかけて、心と止めた。上総はちょっとだけ間を置いた。

「勘違いされるようなことをどうせしていらっしゃるんでしょう。俺は先輩の趣味についてとやかく言うつもりはありませんが。それより、少し相談したいことがあるのですが、そちらまでお邪魔してよろしいですか」

「どうせだったら、俺が品山の方に行く。ほら、この前入ることができなかった喫茶店、『聖少女』だったか。あそこにもう一度、入ってみよう」

「『聖少女』ですか。でも大丈夫ですか。本条先輩の家からだとかなり遠いですよ。別に駅前でもかまいませんが」

「いや、いろいろ事情があってあの辺には立ち寄りたくない」

理由を本条先輩は言わなかった。上総も問い詰めはしなかった。

「では申しわけないのですが、昼の一時に『聖少女』で」

機嫌よさそうに、本条は受話器を置いたようだった。

一応は先輩の顔を立てて敬語を使っている。でも、二人の時に話す内容はかなり言いたい放題言っている。学校から離れたらなおさらだ。先輩意識が皆無だといわれても仕方ないだろう。

上総もこういうのりは、本条先輩にしか使わなかった。

中学一年、評議委員男子限定歓迎会で悪酔いし帰ろうとした上総を、家まで送っていつてくれたのが本条先輩だった。

ただビールをひとくちだけ飲んだだけ。上総はこの時初めて、自分が下戸だと知った。まずいと思ったからすぐに、用事のある振りをして結城先輩の家から出た。自分ではうまくごまかしたつもり。本条先輩もよく気付いてくれたものだとも思う。

まだ肌寒い四月中旬の午前様、父親が泊り込みというのをいいことに、初めて酒を口にした。激しい吐き気とめまいにふらふらになりながらも、なんとか外には出られた。本条先輩が追いかけてこなければ、たぶんその夜は苦しみながら野宿していただろう。下手したら警察に補導されていたかもしれなかった。

朦朧としたまま歩いていた上総をすばやく、自転車に座らせ、途中休憩しながら品山まで送ってくれただけではない。たまたまその夜は父が泊りだったこともあり、夜が明けるまで面倒を見てくれた。

してくれたのが本条先輩でなければ、きっと自分でも許せなかつただろう。

初めて評議委員会で本条先輩の発言を聞いた時から、こういう切れ味のある人間になりたい、とあこがれた存在だった。

学年トップの成績でありながら、ルックスもきりりとしたもの、銀縁めがねで少々格を落としているのがしゃれている。学内では恋人希望の女子がたくさんいるというのに、他の中学、高校にそれなりの恋人がいるという。

一時期は

「本条里希は百人切りを目指している」

とか

「初体験は小学校の時らしい」

とか

「高校生を妊娠させた」

とか、かなり欲望にみちた噂が流されていた。どこまで本当なのかはわからない。ただ、それなりの関係を持っていることは確かのようにだった。

一年間、本条先輩からよく伝授されたことのひとつに。

「することはしている。だが、相手を傷つけることはしない。男の義務として」
なる名言がある。

「複数の女子と付き合うのですから、傷つけないこともないんじゃないですか」

「具体的に言うと、妊娠を絶対にさせないこと、そして病気を持たせないことだ」

去年の今ごろは、本条先輩から具体的な内容を聞かされるたびに、生返事を返していた。理解できない感覚だった。もちろん上総に好奇心がなかったわけではない。早い段階で、その手の知識は雑誌や本で大量にたくわえていた。ただ自分の身に置き換えて考えることができなかった。本条先輩の感覚が自分と重なることがあるのだろうかとはぼんやり考えるだけだった。

——本条先輩のようになれば。

本条先輩のようにいつも冷静沈着に、それでいて必要な時はきっぱりと片をつけられるようになれば。

軽さと重さを使い分けるだけの器量があれば。

いつしか上総の中で、本条里希先輩の存在は自分のありたい姿に変わってきていた。軽い調子で語りかける心地よさと、うじうじしている連中に対して一気に畳み掛ける迫力とが交じり合い、本条先輩特有のカリスマ性をももたせていた。上総がいつかは手にしたいものばかりだった。

いつも、クラスの問題が起こった時、いつしか上総は

「本条先輩だったらどうするだろう」

「本条先輩ならこういう時どう考えるだろう」

と問い掛ける癖をつけていた。

美里と話す時も無意識に、「本条先輩だったら……」と口にすることが増え、よく言われたものだった。

「立村くん。本条先輩ならこうするかもしれないけど、立村くんはどうしたいの？」

「そうだな……俺だったらたぶん、本条先輩の案をもう少しひねるだろうな」

「じゃあ、無理に本条先輩のことを意識しなくたっていいじゃない」

美里には、上総が感じている本条先輩へのあこがれを理解してもらうことは難しそうだった。決してそれ以上は口にしなかったし、わかってもらおうとも思わなかった。

「でもね、本条先輩の彼女ってかわいそうよね。何人目？ この前、こずえから聞いたけど、ま

た駅前で別の女子と歩いていたんだって」

「先輩の偉いところは、青大附中で決して、手を出さないことだろうな」

「偉い？ そうかな。ただ自分の身を守りたいだけなんじゃないの。私は本条先輩を、評議委員長としてはすっごく尊敬しているけれども、ただね、ああいう付き合いは絶対にされたくないな」

部屋に戻り、大判の封筒に三冊の写真集を突っ込み、バインダーにはさんだ。財布だけをポケットにつっこみ、腕時計を確認した。特に見られて困るようなものは、あと見当たらなかった。

アイドル狂いの結城先輩は、かなりきわどいアイドルポスターを持っているようだが、上総の部屋にはなかった。

羽飛貴史だったら、それこそ鈴蘭優の写真集を全部持っているらしい。隠すこともなく、堂々と本棚にならんでいるのがすごい。どうして隠さないのか聞いたら、

「なんで隠すんだ？」

と、反対に問い返された。現役アイドルだから、それほどえげつないアングルのものは少ないのだろう。

空気を入れ替えた後、麻布のベストをはおり上総は出かけることにした。本当だったら自転車で駅前にしてほしかったのだけれども、本条先輩の希望だ。仕方がない。風がまだまろやかなうちに店に入っていたかった。昼からはだんだん暑くなるだろう。

父にも声をかけず、上総は家を出た。

歩いて十分くらいのところに『聖少女』は建っていた。

ひっそりとしたたたずまい、舗装されていない道、瀟洒な和洋折衷型茶房として、知る人ぞ知る穴場だった。

小さい頃から上総は、母に連れられてお茶をすすったり和菓子をいただいたりしていた。遠くから車で来る客を見込んでか、いつも駐車場は五台の車で埋め尽くされている。暇ではなさそうだが、でも座れないほど込み合っていることもなかった。

薄暗い店内の中、金をあしらった花柄のソファに、黒大理石のテーブル、小さめのシャンデリアが遠慮がちにぶら下がり、格子戸は目線のところまですりガラスを使っていた。頭の上くらいしか見えないので、誰がいるかなんてことは、外からは見えない。

露草の紫だけが色のアクセントとしてちらついていた。ふっと、何かの拍子に薫るのは、膝まで伸びる青草の匂い。なんとなく、手元でちぎってみた。緑色の液がついたのは、柔らかい草だったからだろうか。

上総が『聖少女』を友達との待ち合わせに選ぶのは、本条先輩と会う時だけに限られていた。

もちろん一回のお茶代が千円ほどかかるという、経済事情も絡んでいる。上総にとってはそう大金ではない。あまり無駄遣いしない性格だから抵抗はない。貴史をはじめとする同学年の連中とは、やはり金銭感覚が違い過ぎた。本条先輩の場合は、一回千円感覚のお茶を、「もったいない」ではなく「ちょっと楽しめる」と感じてくれた。

かすかにさわさわとゆれるしだれやなぎの並木に、上総は目をちらりと留め、すこし重みのある道を歩いていった。おとといの雨が、まだ地面の下に残っているのだろう。吸い付きのいい土の感触が感じられた。

普段だったら自転車を使う。でも、『聖少女』に行くのならばそれなりの雰囲気ですてきな足運びたい、上総のこだわりだった。

ひとりぼんやりと、煎茶と和菓子のもてなしを受け、いろいろ想像をめぐらせていると、なんだかすべてのことが屏風をたたむように片付いていく。そんな気がした。自分の部屋では感情に押し流されて思わず泣いてしまいそうになる時も、ここだったら、無理なく耐えられる。

引き戸を開けて、軽く会釈した後、案内されたのは一番奥の窓際だった。客は、ひげを蓄えた上品な老紳士と、腰まで髪を伸ばした大学生風の女性だけだった。二人とも、「抹茶セット」を注文したまま、文庫本を読んでいた。たぶん、常連だろう。店の方も心得ていてか、たまに冷えた番茶を入れ替えてあげたりして程度だった。追い出そうとする風でもない。

おそらく上総の顔を、小さい頃から見覚えているだろうに、それでも不必要に立ち入ってこない適度な接客態度に、いつもほっとしていた。

ソファーにまず、バインダーを置いて後、やはり抹茶セットを選んだ。これだとわざわざお茶を立ててくれた後に、和菓子三種類を選ぶことができる。でも本条先輩を待たずに食べるわけにはいかない。

「もうひとり来てからでいいですか」

と一言添えた。

本条先輩が来るのは、あと十分くらいしてからだろう。

いつもながら、本条先輩の姿は自分とひとつ上だとは思えなかった。

笑みを浮かべながら、二言三言、尋ねた後すぐに上総の居る席に向かって歩いてきた。

「お前のことだ、後ろの方にひっそり座っているとは思っていたんだけどな」

「さすがよくお分かりです。今日は呼び立ててしまって申しわけありません」

「なんか用でもあったのか」

「いろいろと」

上総はすぐに答えられず、軽くごまかした。思い出した。

「もしお時間があるようだったら、と思っただけです。評議の関係でもあったから」

「なに硬いこと言っているんだ。どうせ、俺に会いたかったんだろ」

「学校で毎日いやってほどお会いしているっていうのに、なんでいまさら呼び出さなくてはならないんですか」

敬語ですると飛び出す。上総にとって普通の言葉。

「まあいいよ。愛の裏返しだろ。それはともかく、俺も立村に確認しておきたいことがあったからなあ」

「先に注文しませんか。ここでは抹茶セットが一番いいと思います。立ててもらった抹茶と、和菓子がお好みで三個選べるという、なかなか豪華なセットです。俺はそれで頼みますが、本条さんは」

「それなら変わったのにした方が面白いな。この、クリームみつまめセットというのに非常に俺は引かれるんだな」

本条先輩は酒に強いくせに、甘党だった。

注文も終り、上総は潜めた声で話を持ち出した。

「この前の、一年学年集会のレポートなんですが、一応出来上がったのもってきました。学校で渡してもよかったのですが、直すところがあるなら今日のうちに直しておきたいので」

金曜にまとめたものだった。実は土曜日のうちに片付いていた。無理に早くしなくてもよかったのだけど本条先輩に会う口実としては、ちょうどいいものだった。

「ああ、あれな。クイズ大会というのは、なんだか去年の秋、やったものと同じのような気がするが、まあぼろがでなかっただけ、よしとするか。杉本梨南もよくがんばったしな」

「杉本、だけ、と言った方が正しいですね。正直なところ」

「今年の一年はどうしてああも、いかげんな奴ばかり揃ったのか理解に苦しむよな。立村。何

よりもなぜ、あそこまで男子と女子がいがみ合っているのか、俺には全く理解できねえよ。見た目可愛い子もいるっていうのに、誰も口説こうとしない。もったいないことするよなあ」

「お願いですから、本条先輩が手を出すのはやめてください。これ以上複雑になったら、もう目も当てられませんから。それに来年俺たちが三年になった時、地獄を見そうな気がしますから」

現一年生の『やる気なさ』には、上総を始めとする二年生、および本条先輩を含む三年生も頭を痛めていた。おそらく、委員の選出方法が今年的一年担任一同によってかなり変更されたからだろう。去年までは「評議委員会」イコール「青大附中内社交界」としての地位を確立してきたのだが、一部の教師から『もっと部活で自己表現をするべきでは』という声があがり、最初に部活を選ばせた後に委員を決めるという方法を取るようになったという。

去年はその逆で、委員会を決めた後、可能かどうかを調べつつ部活に入るという形式だった。必然、委員会が最優先とされ、部活には入れないとあきらめる者も続出した。体育系の部活に入りたかったのに意に反して委員会へ放り込まれた奴にとってはかなり悔しい現実だったらしい。

なぜ二年の評議委員がまとまっているかという、深い意味はない。体育系の人間が全くいなかったからだろう。文化系でやるべきことは、ほとんど評議委員会で可能なことばかりだった。合唱も、演劇も手芸も文芸も、映画もビデオも音楽も、みな評議委員会でまかなえる内容のものばかりだった。

「言っちゃなんですが、喜んで評議になった奴がほとんどいません。それは大きいですね。もっとも俺も最初はやる気があったわけじゃありませんが。でも、一ヶ月くらいで慣れました」

「自分で慣れたと、思っているのかよ。全く、お前はだからガキだっていうんだよ」

表情はさらっとした笑みを浮かべたまま、本条先輩は上総に向かい、つぶやいた。

「もちろん、本条先輩、結城先輩を始め、先輩たちには感謝してますよ。もちろん」

「お前の面倒見てきたのはほとんど俺じゃないかよ」

否定できないところが辛い。

「とにかく、今の一年生をもう少し仕込まないと、来年苦勞するのは今年の二年生なんだからな。夏合宿の時になにか考えた方がいいかもしれないな」

「ただ、杉本が……」

上総はもうひとつ、気になっていることを告げた。

「杉本梨南のことなのですが、俺から鼻眞目なしに見ても、かなり切れる頭を持っていると思います。あの一年の中でも、杉本だけは認めていいんじゃないかな。第一、ほとんどクイズ問題の設定から点数付け、あとは構成実行までプランを組んだのは杉本でしたし。それと他の連中と一緒にするのはちょっと、まずいいんじゃないかな」

「お前は杉本をひいきしてるからなあ」

「まともに話して通じるのが一人だけだってことです。それに、杉本は一生懸命ですよ。準備の間もしょっちゅう、俺に質問を浴びせてきましたし、わかりづらいようにと文章でまとめていろいろ相談持ちかけてきましたしね。その内容がみな、論理だっていて、わかりやすいんだな

。これはやられた、と思いましたよ。あれでもう少し、人当たりがやわらかければ問題ないんだけどな」

杉本梨南のことを話しているうちに、自分でも止まらなくなってきた。

一年生の中で唯一、やる気を見せている女子評議委員一年生だった。

案を練っているうちに他の一年男女がみな、用事を思い出して帰ってしまった中、杉本だけは自分なりに計画をこしらえて、上総あてに提出してきたのだった。二年生が補佐をして、一年生だけで計画、実行するという形式だったのだが、実際は杉本梨南が計画を立て、上総たち二年生と本条たち三年生が手伝った、というのが真相だった。

手伝った部分というのは、杉本が苦手としている、男子生徒たちとの折衷であったりもしたし、教師たちとの打ち合わせでもあった。

そう、男子との受けが異様なほど、悪い女子だった。

上総から見ると、そんなにむかつくことはしていないように感じられる。むしろ、人見知りか激しい分、信じられる相手にだけは本心を見せるという、ひたむきな部分が見え隠れした。上総には、しつこいくらい質問の手紙をよこしてきた。こんなことまで考えるのか、と思うくらい影の部分まで目を配っているのに、上総はかなり驚いた。

『立村先輩にどうしても、お願いしたいことがあります。私は男子に嫌われていると思うので、私が言ったらきっと、いやがられると思います。でも、この企画はクラスの男子たちにも参加してもらわないと、意味が無いと思います。ずうずうしいお願いだと思いますが、先輩の方から、その旨を伝えてもらえませんか』

切実な問題だったので、上総はすぐに手はずを整えた。

先輩から後輩への命令は、理不尽でなければ絶対だった。

杉本が自分の苦手分野を理解して、どうやってうまくいくかを冷静に考えているところが、上総からすると偉いと思うところだった。だからつい、夕方まで相談に乗ったり、話をしたり、たまには別のことで助言してやったりと、自分なりに気を遣っていたのだろう。

それが、本条先輩の言う

「お前はひいきしているからなあ」

に繋がるのもしれなかった。

仕方ない。わかるのだから。

杉本梨南が必死に努力している苦しみが、伝わるのだから。

似た者どうしなのかもしれない。

ただ、女子だから、異性である分、優しくしてやれるのかもしれない。

「そうだな、杉本に関してのみ、例外にしてやらなくちゃならないな。ただな、あの子ども、悪いが、女子としてはちょっと、避けたいタイプであるのも認めなくてはならない事実だ。お前の趣味はだいたい見当ついているが、いかにも男子を小ばかにしたような言い方は、やめさせないとまずい」

「本人はあれでも精一杯、気を遣っているつもりなんでしょう」

「でもな、『くだらないことでべたべたしている暇があったら、もっと考えてください』なんて言えるか？普通。あれはまずいと思ったぞ。まあ、立村がしょっちゅう杉本の性格について弁護しているから、俺も大体、受け流すことができたけれどな。一年の連中にも同じこと言っているとしたら、殴ってやりたくなるぞ」

「理由はありますよ。最初の頃、杉本のことで本条先輩、かなりまずいことを言ったでしょう。それですよ」

「なんか、言ったか？ 俺？」

「自分で考えてください。悪いけれどあれも、俺はまずいな、と思いました」

ようやく運ばれてきたセットもの二種類を受け取り、上総はまず、茶碗を両手で抱えた。

「たぶん、相手が清坂氏とかだったら、冗談で受け流してくれると思いますよ。でも杉本の場合は、かなりそういうことをいわれたくないとかたくなに思っていたようです」

「ははあ、あれか」

ようやく気付いたようで、本条先輩は軽く舌打ちをした。

「相手を選ぶべき、だったかもな。一応俺としては、誉め言葉のつもりではいたんだが」

「女子はそう思わないでしょう」

「いや、他の子とかは喜ぶけどな。『君の胸は握りごちがある！』とか言う」と

——そりゃあ、先輩の前で見せられる相手だからだろう。

心で思ったけれども言わずにしまっておいた。

杉本梨南の胸が、他の女子にくらべてふくよかで、かなり目立っていたことを否定はできなかった。上総も早い段階から、その点に気付いていた。本条先輩の気持もわからなくはない。しかし、思っても絶対に口に出すべきことではないだろう。

すべての部分で本条を手本にしたいけれども、女子に対する感情だけは絶対に重ねたくなかった。

理解できないままでいたはずだった。去年までは。

上総はワゴンで運ばれてきた和菓子を三種類選ぶことにした。琥珀色の羊羹と小ぶりのヨーグルトケーキ、あとは卵色にほんのり焦げ目がついている桃山だった。

「お前も結構甘いもの好きだろ」

「和菓子が甘くないわけじゃないですか」

意味ありげに本条先輩はじっと上総の手元を見つめた。他の奴だったらいらだつのに本条先輩にされるのは平気だった。

本条先輩があんみつを平らげ、上総がヨーグルトケーキを食べ終えた段階で、ふたつ前の席に座っていた女性が会計を済ませ、店を出て行った。

——よかった。

こういう話をしている時に女性がいるのを感じるのは、やはり恥ずかしいものがあった。

もっとも本条先輩はさっきから気になっていたようで、なにかあると振り返っていた様子だ

った。『青大附中の女たらし』の名は伊達じゃない。

「ところで、いいですか」

桃山を指差して、食べるかどうか尋ねると、答える間もなく本条先輩は箸で素早くつまみ、まるごとほおばった。

「もう少し味わったっていいじゃないですか」

「人の食べ方に口出しするなよ。おいしいものはおいしいんだ」

上総はさらに声を潜めてささやいた。

「お願いしたいことがあるのですが、かまいませんか」

「なんだよ、まじめな顔をしてさ」

上総は脇に置いていたバインダーから、大判封筒を取り出した。中には例の写真集が三冊、入っていた。

「先日お借りしたのなんですが、学校で返すのもまずいでしょうから、ここでお返ししていいですか」

袋を受け取り、中をのぞき、本条先輩はきょとんとした表情で上総に尋ねた。

「これ、お前にやったんだから、別に返さなくてもいいってさ」

「それはわかっています。でも、やはり借りたものはきちんと、お返しするのが義務ではないかと」

「どうしたんだよ。立村、使わないわけじゃないんだろう」

「そういうわけではないですが」

口ごもった。さすがに「母に見つかったら半殺し」なんてことは言えなかった。いかにも何か、怖がっている臆病者に思われそうだった。

本条先輩だったらきっと、堂々と本棚に並べているか、机の中にきちんと整理して納めているのだらう。

「それとも、中のモデルの好みが変わったとか」

「そういうわけでもありません。すみません。本条先輩には感謝しています。ただ」

「はあ、誰か好きな女子でも出来たのか。でもそれだったら、なおさら必要だよな。欲求不満もたまらさうし」

「本条先輩、どうしてそういうことに話が結びつくんですか」

「いや、だってさ、立村の場合だと顔にすべて書いているからさ。見ていておもしろい」

思い当たる節があるのが、悔しくてならなかった。本条先輩のまなざしは千里眼だ。上総の考えていることに関してのみ、すみからすみまで見通すのが怖かった。

「まあいいよ。また後で別のタイプのをやるからさ。ちなみに立村、この中ではどの子が好みだった？」

「こういうところで話すことじゃないでしょう」

隠しても無駄だとわかっていながら、上総は目をそらしたまま答えた。

「無理にとは言わないけどな、そのことばかり考えて発狂しそうになっているよりも、そんなもんだと割り切ったほうがいろいろ楽だと思うよ。お前、いつもそうだろ。自分だけそう思ってい

ると信じ込んでいるだろう。だからお前はガキだって言うんだよ」

口調は真摯で耳に残る。

言い返せずに言葉を搜す。

見つからず、いらいらした。

上総をやわらかく見つめたまま、本条先輩はゆっくり、言葉を継いだ。

「なんというかさ、二年になってから立村、俺の話をずいぶんまじめに聞くようになっただろう。いや、評議関係ではなくて、付き合っている時のこととかさ」

「そりゃあ、一年本条先輩のもとで勉強すれば、関心も持ちますよ」

ぼそとつぶやき、ずっと目をそらしていた。曇り硝子の向こう側を見通すように睨みつけていた。

「それまでは、信じられないって顔であきれ果てていたくせにな。どうして女子とそういうことするんですか、とか言いたそうな顔しててさ。結城先輩も気付いていたようだ。よく話していたよ。『立村をもう少しまともなすけべ野郎にしないと、このままだとまずいぞ』とか言って。だから二人で相談して、お前が好き そうなタイプの写真集を選んだというわけなんだ。結城先輩も卒業したから、もう時効だけだな」

全身が熱くなり、逃げ出したかった。

表情を見せたくなくてずっと反対の方を向いている上総に、本条先輩はいらだつようすを見せなかった。

二年に上がるまえの春休みまで、なぜクラスの連中が女子の胸や唇について騒ぐのか理解できなかった。。

猥談の席にいたこともあったが話だけをふんふんと聞いて、あわせていた程度だった。

その頃はまだ好奇心だけが先行し、実際の感覚がどんなものなのかわからなかった。ただ、語っている連中の顔がどうしても気持悪くなり、たいていは途中で抜けた。

本条先輩と二人でいる時は一応、聞いてやっているという態度を取り、半分無視した態度で聞き流していたものだった。

しかし、実際に経験してみると湧き上がってきたものは強烈すぎてコントロールできない代物だった。許せなかった。

一度は鏡をみつめて。その瞬間どんな顔をしているのか見据えたこともあった。効果はたしかにあったと思う。がまんできるところまでは堪えようと思えた。

結局は屈してしまう自分の弱さが許せなかった。

うまくみせないでいられる自分でありたかった。

授業中いきなり昨日見た夢を思い出したり。

何かの拍子に女子の素肌に触れてしまったり。

本条からもらった写真集をめくっているうちに、逆流してくるように我をわすれてしまいそうになったり。

本条先輩の言うとおりに、誰にでもあることなのだろうし、上総も全くそういうことを知らずに

いたわけではなかった。頭の中ではわかっていた。身体の中でも答えは出ていた。

絶対に本条先輩のように『欲望の赴くままに』突っ走ったり、南雲のように告白をかましてしまったり、手と手をつないでにやにやするようなカップルのようにはなりたくなかった。目をそらしたくてならなかった。

写真集の、哀しげな少女のまなざしをじっと見つめ、写真の美しさについて語る事ができたならどんなに楽だったろう。

そういう人間でありたかった。

夜の夢に出てくる顔のない女性を押し倒すような夢におぼれたくはなかった。

裏切られるたび自分を責めた。

母に見られたくないから写真集を返すというのも、口実に過ぎない。

本当は、誘惑に負けてしまう自分を思い出してしまうから、自分の手に届かないところまでおいやりたかっただけだったということ。美里との「付き合い」がもしかしたら、自分の激しい感情に裏打ちされているから受け入れただけなのかもしれないという、恐怖から抜け出したかっただけだったこと。

結局、美里とどうして「付き合い」ことを受け入れてしまったのか。

——本条先輩は、どうやって、付き合いたいと思ったのだろう。

——やはり、気持ちいいからだろうか。

——第一、「付き合い」ってどういうことだ？

——恋愛感情って一体なんなんだ？

——身体が勝手に反応するくせに、清坂氏にはそういうことを感じたことがない。わからない、なんで俺は

「いいよ、清坂氏だったら」

と脳天気な答えを返してしまったんだろう。

本条先輩の表情が全く変わらないのが救いだった。

上総はのど上から空気を込めたような声で、ささやき返した。

目を上げることはできなかった。

「本条先輩、すみません。でも今は受け取ってください。理由は聞かないでください。どうしても今は言えません」

「そうか、まあいいよ。溜まってがまんできなくなったら、遠慮なく言えよ。うちにはこのくらいの写真集だったらいくらでもあるからさ」

男四人兄弟の末っ子という本条先輩は、たぶん日常的に猥談をしながらいるのだろうし、常識をわきまえた範囲内でおおっぴらに語ることも抵抗がないのだろう。顔を赤くすることもなく、堂々と自分の感じたことを言い放つ性格が、上総はたまらなくうらやましかった。

他の連中だったら、絶対自分の中に入れてくなかった。

本条先輩だけは別だった。

——こんな風に振舞えるなら、自分を許すことができるだろうに。

——こんな風に、俺もさらっと流せばいいのにな。

——どうしてこういう性格になってしまったんだろう。

——そういうものなんだって、あっさり受け入れてしまえばいいのに。

——まだ俺は、本条さんのようになれない。

——自分なりに精一杯、努力してきたつもりだけど、結局は感情に流されて、衝動に屈して、あとでめいっぱい後悔するような人間のまなんだ。

——こんな奴をどうして、清坂氏は「好みだ」と言ってくれたんだろう。

——付き合うという意味すらわかっていないくせにあっさり、流されて受け入れてしまうような俺の性格が、たまらなく腹立たしい。

——金曜日の放課後にもっと、何か、言い方なかったんだろうか。

——情けない。

雲がうっすらと層状に広がってきた。浅い黄金色の輝きが窓に反射した。品山の山色は、決して水色ではなく、近くの緑色がかすかに迫ってきている。山の近くゆえ天気も変わりやすい。

もうこんな時間かと、上総は本条先輩に時刻を尋ねた。

「どうせこれから暇なんだから。卓球でもやりにいくか？」

「そうですね。久々に。今回も勝たせてもらいます」

ひそやかに勝利宣言をした。卓球だけは、誰にも負けない自信がある。

「冗談抜かせ。今日こそ立村の連勝記録をストップさせてやる」

並んで歩くと、本条先輩の方が首ひとつぶん背が高かった。

まだまだ、この人にはかなわない。

背伸びしたって届かない。

でもいつか、一対一で話ができるような人間になりたい。

伝票を持って立ち上がった本条先輩の背を追いかけた。

毎朝、古川こずえとの『朝の一戦』は気合を入れていどまなくてはならない。

「あんた童貞？」

とぴょんと聞かれた時に、上総は鳩が豆鉄砲くらったように、しばらく無言でこずえの顔を見返していた。

後で貴史に一言、

「お前さあ、もう少し何か反応しろよ。あきらかに立村、それだってことがばればれだろうが」と言われて、さらに動揺した。自分なりにかわしていたつもりではあったのだが、周りからしたら、

「恥ずかしさのあまり絶句してしまったかわいそうな立村くん」

という結論しか引き出せなかったのだろう。

仲のいい連中はだいたい、六月までに誕生日を迎えていた。貴史が五月、美里が六月初旬、こずえは四月。上総は九月十四日生まれ。明らかに末っ子扱いされている。あまり気にしないようにしている。

こずえは楽しそうにそこをついてくる。

なにかあると

「本当に立村って私の弟って感じよね」

と言う。

「血がつながってなくて、本当によかったよ」

まだ際どい言葉は出てこない。

ほっとした気持ちで上総は次の授業準備をした。

朝一番は英語の授業だった。得意分野だ。すでに英語の小道具であるカセットテープは運んできた。音楽の授業とちがって、ちゃんと一台ですんだ。

「リーダーの暗誦部分、きちんとやってきた？」

「やらなくちゃ、立たされるだろ」

教科書一ページ分を一週間かけて暗記し、ひとりひとりが抜き打ちで暗誦しなくてはならない授業だった。出来ない人は教室の隅に立たされ、一時間じっと待っていなくてはならなかった。

幸い上総には、『方程式は覚えられなくても英語は全部暗記できる』能力が、神さまからあたえられていた。その点は悠々としていられた。

ひとりだけのうのうとしているのも気が引けるので、こっそりカンニングペーパーを作り、かなりまずいという連中に渡すことも忘れてはいない。

机の上に見えないよう貼り付け、それを読みながら暗誦した振りをするのだった。先生の机からは見えないはずだった。美里も貴史も、そのお世話になっているのはいうまでもなかった。

「どうして立村って、文系ものだけこうも得意なわけ？」

「知らない。好きだからだろう」

「いったい、いつ勉強しているの？」

「夜かな。一番頭に入るのは十二時くらい。三回くらい音読して、五回暗誦できれば、あとは寝るだけで問題ない」

珍しく下ネタを持ってこない。今日はまじめに英語のネタか。と思いつつ英和辞典を取り出した。

「一晩寝ると忘れていたりしない？」

「全然。かえってよく頭に入っていたりする」

「ふうん、そうなんだ」

こずえはなにやら思いついたようににやにやししながら頬杖をついた。

いやな予感あり。上総も用心深く言葉を継いだ。

「寝る前に読んだり観たりしたものは忘れにくって本当だよな」

「ふうん、夢に英語が出てきたりする？」

「社会の年号を覚えていたりすると、明治時代にタイムスリップした気持ちになったりする」

「ふうん、じゃあ、さあ、夜見る夢に、誰かさんがでてきたりしないの？」

「誰って、歴史の登場人物とかか？それはたまに……」

こずえは下からじーっと見上げた。

「おかず本の女の子、とか？」

言われた意味がわからなかった。

「立村のように、記憶力が鋭い奴だったら、当然、見ているよね」

「何、それ。もっとわかりやすい表現を使ってほしいな。第一なんだよ、その「おかず本」って」

「ははあ、立村ってば、まだ未経験なの？ 写真の方は、あ、わかった。まだうちのクラスの集合写真使ってるんじゃないの？ 一年同じクラスだったら、結構、『使える』写真とか、たくさんありそうじゃないの。セクシー系とか」

上総は無言でこずえの口元を見つめていた。

頭の中に言葉が混乱してきて何を意味するのかがつかめない。

何か、しょうもないねたを振られているのはなんとなくわかる。

——でも、何が『使える』写真なんだろう。

——なんで、うちのクラスの集合写真を使う必要、あるんだ？

「やだなあ、私もあんたの夢に出てあーんなことやこーんなことさせられているかもね。記憶力いいのも、考え物だよねえ、美里」

美里もいつものパターンだと知っているのか、まぜっかえしてくれたりする。軽く、、

「こずえ、やめときなよ。えげつないよ」

と残して、さっさと自分の席に戻った。

授業が終り、男子は男子、女子は女子と分かれ、保健体育の授業に移った。青大附中では性教育の時間をしつこいくらい取り込んでいる。教科書そのものはさほど、詳しい内容が記述されているわけではない。ただ、何かというと月一回は生殖関係の話題を先生達に取り上げる。一年の頃だったら妙に授業前、授業後の盛り上がりがすごいものだったが、今ではそんなこともない。ひっそりと、いつかは自分の実践用に役立つことあるのか、と考える程度だった。大して関心のない顔をし、通すのが自然なものだと思っているようで、あえて話題にすることもなかった。

C組の教室に移り、あいうえお順に並んだ。隣のクラスとはいえ、ほとんどしゃべったことのない奴も多い。一番後ろの席で貴史とふたり、テレビ番組の話をしていた。もっともほとんどは、貴史のお気に入りアイドル『鈴蘭優』の出番が少なかったとか、最近は大人っぽい系統の服が多くなって不満だとか。肝心の番組を観ていない上総はあいづちを打つしかない。

「サインもraitたいとか、思うのか？」

「そりゃ、欲しいに決まっているだろ。懸賞にも応募しているけどなああたねえよ。競争率高いものなあ。立村はあまり、アイドル系とか好きじゃないのか」

「いない。いないな」

いつものように同じ答えを返した。

「前から言っているけど、同じ顔に見えるんだよ。ちょっと雰囲気がいい、という写真とかはあるけれども、だからといってそういう人がいいっていうのはないな」

「優ちゃんのかわいさをわからない奴がここにもひとり、と。お前だったら『榛野七草』あたりかなあ。ああいうちょっと気の強そうな色っぽい感じの子も、好みじゃねえのか」

「誰、それ」

思い当たらず、上総は首をひねった。貴史もちらちらとためらい気味に、
「ここだけの話だけどな、美里の昔の相手、よくあいつのことを『榛野七草』に似ているって言っていたんだと」

「そうなんだ。今度じっくり見てみよう」

「言われてみると、なあ、確かになって思うなあ。ぞくぞくするってところはないけれど、はっきりした顔の雰囲気はなんだかそれっぽいかなあ。お前、どう思う？」

初めて聞く言葉が飛び出して、上総は戸惑いながらも自然に流した。

「清坂氏もやはり、付き合ったことがあるのか」

清坂美里は『付き合う』の意味を知っているらしい。

——昔の相手、ってことだと、そうなんだろうな。

「でも安心しろよ。とっくに別れた」

「なんで俺が安心しなくちゃいけないんだよ」

いいのか。幼なじみとはいえ、知られたくないことを平気で言うのは。

「気にしているくせに。まあいいけどな。俺には関係ねえよ。それよか、立村。今日の古川、どういうネタを降ってきた？ また『あんた童貞？』か？」

「そういうわかりやすい言葉じゃなかった。なんだかさ、テレビの語学番組でよくやる『スキ

ット』をやらされているみたいだよな。クラスのみなさまを楽しませるために、古川さんと漫才やらされている気がする」

「お互い、ネタを用意しあってきているのが、よくわかるもんなあ。立村、お前も芸人になったよ」

「好きでやっているわけじゃない。こちらだって散々今までひどい目にあっているんだ。全く。一度は逆襲しないとこちらの気持ちが治まらない」

上総はかいつまんで朝の『夜の記憶力』について説明した。

キーワードは『夜』だから、かなり際どいネタ振りをしたかったのであろう。受ける側の上総が理解できないまま授業に突入してしまった。

本当は古川こずえにもう一度確認してみたかったのだが、どつぼにはまるのも目に見えていた。男子だけの授業ということもあるし、羽飛に聞いてみようとは思っていた。

「立村の英語に関する記憶力は確かに尋常ならざるものがあるよなあ。俺、すげえうらやましいよ。でも歴史関係は俺もたまあに夢に見る。織田信長と友達になっちゃったりとかさ」

「俺はそこまで遡らないな、せいぜい明治大正前後。鹿鳴館のあたりを歩いているとか、のどかな感じの話。さわやかな目覚めを迎えられるかもって話ばかり」

「さわやかな目覚めかあ……」

羽飛は、指先でとんと机を叩いた。

「で、立村はどう反応したんだ？」

「言っている意味がわからないから、そのまま黙って聞いていたよ」

「お前、本当に、ばかか」

とうとう羽飛は腹を抱えて笑い出した。

「そりゃあそうだよなあ。俺も優ちゃんの写真集とか、観て寝たら夢で出てくるかもと、思ったことあるぞ」

「実際出てきたことあるのか？」

「ねえよ、そんなの。でもな、確かに夢の中でどういう展開になるかは、そりゃあ、古川のことだ、想像しているだろうなあ。おい、ここまで言ってもお前、わからんのか」

わからず上総は聞き返した。

「ごめん。俺はやっぱ鈍いんだ」

「で、最後にクラス写真まで持ち出したのかよ。まあ、立村がまさか、古川の写真見てあーんなことやこーんなことをしている夢見ているとは、誰も思わないけどな。でもまんざら嘘じゃないってことか」

しばらく考え込むうちに、ぴんとくるものがある。

おかず本、という言葉に、反応するものが確かにある。

昨日返した写真集の束を思い出し、上総はふうっと息をついた。

「つまりなにか。古川さんは俺に、限りなく失礼なことを言っていたってわけか」

「立村、あの場で気付かなくて良かったなあ。凶星か濡れ衣か、その辺は追求しないでおくけ

どな」

「濡れ衣に決まってるだろ！」

「クラスの女子をおかず代わりに使っていたんじゃないかと言われてたら、そりゃ、むかつくだろうよ」

口調だけおだやかにつぶやいたつもりだった。

「いったい何考えているんだよ、古川さんの頭の中、一度勝ち割ってのぞいてみたいもんだな。普通朝一番に浴びせる話題じゃないよな。まったく。本当に女子の考えていることってわからない」

はたして貴史がどう感じているかは見当がつかない。

「だから清坂氏に『あまりえげつないこと聞くな』って言われていたんだな」

「へえ、美里そんなこと言っていたんだ。いつもだったら調子に乗ってつつこみにくるのに。それも仕方ないか。相手が立村だからなあ」

「俺がそういう話嫌いだってわかっているから、気を遣ってくれてるんだろう」

「そういう気遣いできる女子だと思うか？ 美里が」

貴史は鼻で笑いながらさらに続けた。

「六年の時に、『男と女』の違いについてスライド見せられたことあったろ？その時にさあ、俺に聞いてきたんだぜ。『本当に男子ってああいう風になるの、具体的に説明して』って」

具体的に説明ってどういうことなんだろう。貴史と美里のコンビがどういう会話をしているのかが、容易に想像できてしまい、奥歯で笑いをかみ殺した。

「清坂氏なら、やりかねないな」

「だから聞いてやったんだよ、俺だって。月一回のあれっていうのが具体的にどういうもんか、教えろって」

「どっちもどっちだな。で、どう答えた？」

けろりとした顔で答えた。

「次の日、百科事典二人で見て確認した。ああ、そういうことなのかって」

「ふたりっていうのが、なんだかすごいなあ」

保健体育の授業は、知っていることをいまさら聞いてどうする、というのりで終わった。教科書を尻目に、別のことばかり考えているふりをしていた。性教育のテストだったら成績が悪くても可愛げがある、そんな雰囲気すらあった。

「女子の方は盛り上がっただろうなあ」

「おそらくな」

貴史ののんびりした声を聞きながら上総はD組の教室に戻った。

これからひとつ、反撃だ。

「古川さん、あのさ」

「どうしたの、保健体育の授業で興奮したの？」

「新しいネタを仕入れてきたんだろう」

次の授業、国語の教科書で軽く壁を作り、上総はささやいた。

「朝のスキットの説明を、羽飛に全部してもらった」

じっとこずえの表情をうかがった。

「羽飛に聞いたわけ？ ばっかじゃないの！」

「申しわけないな。ぴんどこなくてさ」

もうひとつ、大切なことを伝えねば。

少しだけ間を置いて尋ねた。

「おんなじ質問、羽飛にしてみたらどうだ？」

古川こずえが羽飛貴史に、一年の頃から惚れぬいているのは周知の事実だった。上総に向けるような際どい質問をしないのは、きっと恥じらいがあるからなのだろう。禁忌手だ。普段だったら上総も人の弱みにつけ込むようなことはしたくない。

こずえはしばらく

「なによ、なんで羽飛に告げ口するのよ、ガキじゃあるまいし、何よ、ばか」

ぶつぶつぶやき、上総をにらみつけた。知らん振りし、してやったりと思う。ちらりと様子を伺うと、こずえの表情にはどきまきしている様子が、まだ、消えていなかった。嘘のなさを見て上総は苦味を覚えた。

一緒に通うでもない、特に変わったことがあったわけでもなかった。

上総と美里との『付き合い』はまだ誰も気付いていないようだった。

土曜日の『音楽室十五分事件』あたりにはみな、興味しんしんの目つきだったが、一日休みが入るとみな忘れてくれたらしい。

いつものように授業は進み、休み時間には花札をやり、レコードを交換したりなどして、時は過ぎていった。

誰も気付いていない。

たぶん、秘密はまだばれていない。

心の中にひそひそとする音を聞きながら、上総は朝何気なく美里と顔を合わせ、挨拶を交わした。

「清坂氏、今日の一時間目、茶道の準備には行かなくていいのかな」

青大附中では毎月三時間ずつ茶道の授業が行われていた。茶室が用意されていて、各学年が一時間ずつ茶を立てたり花をいけたり、茶道の基本動作を学ばされていた。もっともこの時間の楽しみは、和菓子を食べることに尽きる。毎日のように、老舗和菓子店から運ばれてくる。食べるだけならいいのだが、実技と筆記の試験は勘弁してほしかった。青大附属にいる以上、ずっと続くことになる。大抵は評議委員と学習委員が準備に出かけて、洗い物をしたり運んだりする。

「そうね、行こうかなあ。あれ？学習委員の二人はどこ行っちゃったの？」

「さっき、菱本先生に呼ばれていたよ」

上総は時計で確認した。まだ十分くらい時間があつた。

「じゃあ、行ってみようか。用事なくたって、用があるかどうか確認するだけでもいいしね」

一緒に教室を出た後、後ろを振り返ると教室が静まり返り、その後笑い声がもれ聞こえた。美里が扉を閉めた後、ぽつりと、

「なんだか、みんな、変だよ。そう思わない？」

とつぶやいた。

「今の雰囲気か？」

「うまくいえないんだけどね。なんだか居心地、悪くって」

美里はゆっくりと上総の隣で、小さい声でささやいた。

「そうだ、昨日こずえに何言われていたの？」

「いつものように、朝のさわやかな寸劇」

すべて聞かれていたことを知っているのだから、上総も照れずに答えた。

「黙っていないで、文句言えればいいのに。立村くんどうしていつも黙っているの？」

「言われている意味がよくわからなかったから」

上総はとぼけとおした。

「嘘、さっき貴史から聞いたよ。貴史もあきれていたよ。俺だったら、一発殴り返すって」

「大丈夫、ちゃんと次の時間言い返しておいたからさ」

さっそく「羽飛に同じこと聞いてみる」という言葉を教えてやった。

「立村くん、意外と残酷なことするのね。こずえ、本気で貴史のこと好きなんだよ。かわいそうじゃない」

「うん、そう思う」

言い返さず、上総はうなずいた。外靴に履き替え、茶室に向かう細い路地に入った。

「あれ、あっさり反省しているの？」

「そう、謝るべきかもしれないな」

短く答えて、上総は周りを見渡した。幸い、誰も居ない。茶室が少なめの竹やぶに隠れて見え隠れした。昨日の夜に大雨が降ったものの、朝になるとすっきりやんで、しずくだけが笹の葉からすべりおちていた。歩く石畳も黒い土が染み付き、重たい灰色に染まっていた。

「あの時はかなり感情に流されすぎたよな、って思う」

「立村くんにしては珍しいなとは思ったんだけどね。いつも、言いたいことを飲み込んでしまうでしょ」

「あのさ、清坂氏」

くぐり戸を開けて、靴を脱ぎ、誰か居ないかを確認した。まだ用意されていなかった。先生も居なかった。どこかで準備しているんじゃないだろうか。上総は背中を丸めてくぐり、茶室の中を一瞥した。小さい部屋、六畳くらいある。本格的茶室とは程遠いといわれているけれども、飾り付けられているものはみなきちんとしたものばかりだった。掛け軸も花瓶もまだ用意されていない。ざらざらした床の間には、先週使った掛け軸が放り出されていた。いったい六月の季語がなんなのかわからないし、茶会の名前もなんだかわからない。ただなんとなく落ち着く。美里もくぐり、靴をすみに置いた後、膝を抱えて座った。

「まだ先生来ていないよね」

「荷物取りにいったんだろうなあ。まあいいか。来るまで待っていようか」

上総も少し間を置いて座った。片膝だけ立ててざっと見渡した。

「あのさ、清坂氏」

「どうしたの」

「古川さんにはまだ、話していないのか」

「うん……まだけど」

「そうか」

「言っているの？」

美里の表情は逆光のせいか読み取れなかった。

「別に、隠すことじゃないし」

言いつつ上総は目線をそらしていた。

「いや、また、朝が大変になるかな、と思っただけであって」

「あ、そうだね。立村くんは毎朝こずえと一戦交えなくちゃいけないんだよね」

くすりと美里は笑った。ふふっというかすかな声が聞こえた。

「でもね、こずえは貴史一筋だからね。悩んでいるんだよ。ほら、こずえも英語の成績いいじゃない。一応、高校は英語科を狙っているらしいのよ。立村くんと一緒」

「高校でも戦いが続くのか？」

「かもね。でも貴史はたぶん普通科で十分だと思っているよ。私もおんなじだけどね。本当はこずえも、貴史と同じクラスになりたいから、普通科に行きたがっているんだろうけど、でもね。周りは絶対英語科を勧めているらしいのよ」

「どちらを選んでもいいという贅沢な悩みか。俺みたく英語科しか向いていない、というのではなくて」

「まあね。でもね、たぶんこずえは英語科選ぶと思うよ。いくら好きだといっても、自分の将来まで代えられないもんね」

美里が何でそういう話をするのかわからなくて、上総は相槌を打った。

「まだ先の話だろう。まだ二年生の半ばなんだからさ」

「公立の子とかは、今から受験の話でぴりぴりしているよ。青大附中のように脳天気で居られるのは、めずらしいことなんだよ」

たしなめられ、上総はいつものように謝った。

「すみません、清坂氏」

「だからどうして謝るのよ」

怒った口調で、またぴしゃりと言われてしまった。

「あのね、立村くん。私、いつも言っているけど、気を遣わなくたっていいんだからね。何か抜けたことがあったって、いまさら変わったりしないんだから。それにずっと、私、変わっていないんだからね」

美里の言い方には、上総へ何かを訴えたいのに言い切れないものが感じられた。もっとわかりやすい言葉があるはずなのに、口の中に塗りこめてしまい、言えずにいるような感覚だった。

——変わってないわけ、ないだろうに。

「あのさ、清坂氏、聞いていいか」

「なあに」

「前、付き合ったこと、あるんだろう」

驚いた顔だけ見たかった。

「え、今、何て言ったのよ」

「だから、前に付き合ったことある奴、いたんだろ」

「何言っているのよ！ ちょっと、誰からそんなくだらないこと聞いたのよ！ もしかして貴史？ あのばか、何考えているのよ」

「いや、話の成り行きでなんとなく聞いただけだからさ。付き合うってこと、わかっているから、いいかなとか思っただけなんだ」

「立村くん、もう一度同じこと言ったら、絶交するからね。いい、全く何言い出すかと思ったら

！ もう、さっさと教室に戻るから！」

あわてて上総も立ち上がり、取り繕うつもりで頭を下げた。

「ごめん、こんどは本当に悪かった」

「今度は謝ってもらうのが当然よね。もう、本当に失礼だよ！」

少しだけ離れ、茶道の先生が来るのを待っていた。失言だったと反省しつつ、美里の方をちらちらとうかがう。美里も深い目をしながら上総を見返していた。

「あの、さっきは、本当にごめん。別に変なこと言う気」

「いいよ。立村くんの考えていることなんとなく、わかるから。それよりも、先生遅いね。このままだと始まっちゃうよ」

上総と一緒に小さな茶室に入ってから十分以上は経過しているはずだった。しゃべっているよりも、なぜか黙っている方が長い時間のように感じられた。茶室に行かねばと思ったのは上総が先だから、言い出しっぺの責任は重い。まさか、別の教室ではないだろうか。

「まさかと思うんだけどさ、清坂氏、俺たちって、別の教室に行かなくてはならなかったってことないだろうか」

「え、だって立村くんこちらの方に、って」

「そう、俺が間違っていた。申しわけない。たぶん、その可能性が高いよ。急いで教室に戻った方がいいかもしれない」

「あ、でも、待ってよ。だって茶室を使うっていう話は、先週聞いたよ。先生が話していたよ。だったら、言い訳できるじゃない。一応茶碗とひしゃくだけ持っていこうよ」

「そうか、何やっていたんだって怒られるのはたまったもんじゃないよ」

適当に、その辺にあった茶碗を両手で抱え、上総はにじり口へ体をかがませた。が、雨音に思わずぱたんと戸を閉めた。

「まずい、雨降り出しているよ。それも大ぶりだ」

「本当！ どうしよう。雨にぬれちゃうね」

美里の方に振り返ると、上総は少し考えた後、思い切って言ってみた。

「どうせだったら、今日の茶道はエスケープしようか。はからずしも、雨に閉じ込められましたってことにしてさ」

「立村くん、それ本気で言っているの？」

「なんだか、いくのが面倒になってきた。今年に入ってからはまだ一度も休んでいないからさ。それに、言い訳も利く。こちらにいとずっと思って、掃除をしていたらあつという間に、こんな時間になってしまいましたって」

がたがたびしびしと、薄墨色の雲から雨が降り注ぐ。天井に響く雨音は、美里の言葉も聞き取れないくらい、激しかった。しかたなく上総は側によることにした。

お互い、膝でにじり寄り、でも声はそのまま控えめにささやいた。

「見つかったらどうするとか、思わないの？」

「いいよ、たぶん、この時間になっても来ないんだったら、誰もこないよ」

いくら話しても声が聞こえないとどうしようもない。身を寄せ合って膝を抱えて話すしかなかった。時折、雷が落ちて、がしゃんとどこかにぶつかる音が聞こえた。樹木が真っ二つに割れてしまった現場に立ち会ったこともある。小さい頃だったら、泣きながらベッドにもぐりこんでいただろう。恐怖心は残っている。でも美里がいる以上、意地でもみっともないところは見せたくなかった。

「あのね、立村くん」

言葉が途切れ、空気がほのかにあたたかく流れた時、美里が思い切ったように顔を上げた。直前に話していた時とは全く違う。思い切って打ち明けようとしているまなざしに見えた。

「どうした、なにかまずいことしたか」

「ううん……あのね、どうして、さっき、あんなこと聞いたの」

「あんなことって、どんなことだよ」

「私が前、付き合っていた相手、いたってこと」

「羽飛から聞いたから」

膝をかかえたまま、天井をみあげたまま、答えた。

「あれは勝手に思い込まれているだけなんだよ。立村くん」

「別に、そういうのは気にしないけど」

「ううん、そういうことを言いたいんじゃないわかって。私ね、確かに小学校の頃、男子と仲良かったし、貴史以外にもいい奴とかたくさんいたから、よくつるんで遊んだりしたことあるよ。一年の頃に言われたことあるんだけど、私、三年生の先輩たちから『男出入りが激しい』とか噂されているみたいなんだ。この前頭にきて、本条先輩を通して直接聞いてみたのよ。そうしたら、単に『男子としゃべることがすごく多い』から、だけなんだって。うちのクラスって、男女仲いいよね。ふたりでしゃべっていても、全然変なこと言われたことないし、たまあにからかわれたりしても、すぐわかってくれるよね」

貴史やこずえたちからからかわれることはあっても、極限まで突き刺すような言葉を投げつけられたことはなかった。話の合間にやわらかくばんそうこうを渡してくれるようなやさしさが残っていた。上総は頷いた。

「ほら、前、南雲くんが彰子ちゃんに告白したことあったでしょ。『理科室の告白』」

「ああ、あれは南雲の玉砕勝負に、奈良岡さんが落とされたって奴だな」

「もし、今の一年生たちのように、男女嫌いあっている中であの事件が起こったら、と思うと、ぞっとしない？」

「南雲たちのためにも、ほんとうに今の学年でよかったと思っている」

「でしょでしょ。なにげなく誰かがかばってくれて、何気なくうまくいくように計らってくれるような力が、クラスの中に働いているんだよね。誰がどうってわけじゃないんだけどなあ。私が、男子と自然にしゃべるのは、話していて、楽しいから。それだけなのよ。同じくらい、女子とおしゃべりするの楽しいけど。たぶん、貴史は私が普通に話している男子とのことを、なんと

なくだけど『付き合っている相手』と思ったんじゃないかな。あいつはほとんど私の過去、知っているけれど、たまに勘違いするからね」

「羽飛が間違えるなんてこと、あると思うか？」

大親友どうしの美里と貴史である。考えられなかった。

「あるよ、そりゃあ。私だって貴史が誰に熱上げているかなんて、見当つかないもんね。鈴蘭優くらいじゃないの」

「わかりやすすぎるな。たしかに」

手を打って同感した。のどまででかかった言葉を隠した。

「もしかしたら私は、他の人たちからみて、『付き合う』ことをたくさんたくさん、してきたのかもしれない。そう言われるのは、もう覚悟しているの。でもね、私の口から、『付き合っ』って言ったのは、一回だけ」

美里はさらっとしたまなざしで、上総の方を見やった。両手を組んで、膝に重ね、こくんとうつむいた。

清坂美里は男子の間でも人気の高い存在だった。

他人にあこがれるよりも自分から相手の方に近づいていきたい。正しいと思うことを信じて、言いたいことははっきり伝えて、好きなものは好きとはっきり言う。人の辛い時には、黙って寄り添ってくれるような暖かさも兼ね備えている。

何度、上総は美里の気遣いに救われたことか。

本人が意識していないから、あえて口にも出さないできた。

たわいもないことでは「ありがとう」を繰り返してきたけれど、本当の芯は、まだ一度も口にすることがなかった。

一年の冬近い頃だった。

同じクラスの女子に立村上総が言い寄って、振られたらしいという噂が学年に広まったことがあった。

理由は上総も承知していた。

そういう噂を流されてもしかたのないことだと思っていた。

今度こそ、自分はクラスで物笑いになる、そう覚悟していた。

D組の男子たちおよび、美里は全くそのことに触れようとしなかった。教室を出ると散々からかわれるのに、なぜか自分のクラスだけがほわっと包んでくれたようだった。

もちろん『振った』とされる女子関係はそれなりのまなざしで上総を眺めていたようだ。

やがてゆっくりと静まっていった。

何が起こったのかわからぬまま、年が明けた。上総はその後、本条先輩を通して、美里が女子に対してなんらかのフォローをしてくれたらしいと知った。。 本当のことがなんなのかは聞けなかった。

何事もなく二年D組の評議委員として認められたのには、美里の存在が大きかったのも十分過

きるくらい理解していた。

好きとか嫌いとか、簡単に片付けられない気持ち。

上総がしつこいくらい「感謝している」と繰り返すのは、自分の心に一番近い言葉だからだった。

入学式の時、どうか今度こそうまくいくようにと繰り返し祈りながら、教室に足を踏み入れた時。

初めて羽飛貴史に、罵り声以外の言葉をかけられた時。

初めて美里に話しかけられ、緊張しながらも必死に言葉を探した時。 帰り際、もっと話したい、と言われて戸惑った時。

あれから一年以上経つ。

付き合いという言葉で上総は、美里との間を決め付けたくなかった。

ずっと戸惑いつづけていたのは、きっとそれ。

手をつないだり、写真集でかもし出される妄想を繰り返したり、抱き合ったり。そんな形に納まってしまうものではなかった。

周りから好意的に「付き合いちゃえよ」とからかわれる時に感じる不快感。自分がぼろぼろになりそうな時、味方でいてくれた評議委員の女子を『好き』という言葉でいっぴひとからげにしたくなかった。

「どうしたの、立村くん。気、悪くした？」

「ごめん、俺、やっぱりさっき、ひどいこと聞いたよな」

「もういいから。誤解だけ解ければもう何も言わないから」

手は触れなかった。間に人がひとり入れるだけの隙間が空いていた。

「もう少し、小ぶりになるまで、ここで待っていようか」

「うん、評議委員が二人ともエスケープしてしまったなんてね。あとで菱本先生に思いっきり怒鳴られそう」

「一緒に怒られにいこうか」

「一蓮托生、覚悟しなくちゃ」

ちゃぷちゃぷとしたたる雨音が、ちゃぽりという音色に変わった頃。

片手に練習用の茶碗ケース五個と、ふくさ十枚をカモフラージュ用に持ち出し、上総はにじり戸から出た。すでに水溜りは石畳の上まで浸っていて、靴の先がぬれてしまい、気持ち悪かった。後ろから美里も茶筌を持って付いてきた。かすかにしめった草の匂いが鼻についた。

「教室にまず行ってみようか。だれもないかもな」

「なんだか蟻蹙かいそうよね」

うまく泥を踏まぬように、注意深くバランスをとりながら上総は空を見上げた。薄墨の色は雨のしたたりでほんの少し、薄まったようだった。

「お前らどこに行っていたんだよ」

教室に入るや否や、貴史の一声が飛んだ。

すでに三十分以上経過していた。

「俺が悪かった。今日の茶道、茶室じゃなかったんだよな。準備するものとか持ってきたんだ。教室でやるのかなと思ってさ」

「ばあか、お前らがいなくなってから、すぐに菱本先生が来たんだ。今日は緊急の用事があって自習なんだってさ。お前ら運がいいよな。あれっきり他の先生誰もこないからばれてねえよ」

自習。こういう落ちか。

上総はそっと教室の雰囲気をつかかった。

男子は一応、という風に上総と美里を一瞥し、そしらぬ顔でおしゃべりを続けていた。女子はというと、やはり美里に手を振り、上総には冷たい視線を投げかける、もしくはくすくすと笑う。

もっとからかい声の激しい奴を想像していたのに、ちょっと拍子抜けした。

よりによって美里と一緒にエスケープ寸前だったのだ。ひゅうひゅう言われるのは、雨に降り込められた段階で覚悟していた。

「全く、運のいい奴め」

一番、突っ込むだろうと思われた貴史ですら何も言わず、やりかけの花札席に上総を招いた。

「ほら、お前の分、席取ってある」

——いつ、壊れるんだろう。

——いつ、からかわれるんだろう。

——いつ、どうなるんだろう。

授業が終わるまでの間、上総は同じことを考えていた。

別に何が起こったわけでもない。からかわれたわけでもない。

全く何も起こらなかった。

朝は相変わらず、古川こずえとの下ネタ攻撃に対抗策を練り、数学の授業では相変わらずぼけた答えを返して笑われ、英語の授業ではひとりだけ別の副読本を渡されて辞書を引いていたりした。

一部訳知り顔の女子数人が、ひそひそ声で上総の方を見てささやき、笑い合っている。

覚悟していたことだった。

野郎連中の反応がどこか不自然だ。

あれだけしつこく

「お前は清坂だろ」

とからかっていた連中が、何も言わずに花札の席へ誘ってくれた。

あれだけうるさく

「美里とつきあっちゃえよ。好きなくせに」

とささやいていた貴史すら全く美里に関する話題を出さなくなった。

美里から声を掛けられれば、多少なりの話をしているのだろうが、上総に対しては全くといていいほど、ネタを振らなかった。

火曜日の茶道室にて美里とふたりっきり、雨宿りをしていただけのことだ。 たいしたことじゃない、といえばそれまでだ。

でも、あの時

「雨があがるまで待っていようか」

と口にした段階で、上総は覚悟していたはずだった。教室に戻ってくるなり、さんざん冷やかしの嵐に遭うことを。南雲・奈良岡カップルの他、一年の頃は貴史と美里もだった。貴史とこずえ、という時もあった。男子女子の『つきあい』というものに変動が起こった場合は、まずからかいの洗礼を受けさせるのが常だった。

なのになぜだろう。決定的な、三十分の空白だったというのに。

誰一人、上総に対して

「お前何していたんだよ。三十分あれば、やれるよな」

としょうもないネタを突っ込んでくる奴はいなかった。

恋愛沙汰に関する話題を持ってくる奴もいなかった。

花札、期末テストの予想、高校の情報、テレビ番組の話。

ここまできっぱりと避けられると、かえって不安だった。

——何かがある。

——何があったんだろう。

——俺はいつ、どうなるんだろう。

女子以外の噂がないのが、ここまで不安になるとは思わなかった。

かといって、貴史に聞くこともできなかった。

どつぼにはまってしまうような気がしてならなかった。

まだ『つきあい』を隠しておかなくてはならないと、美里とは約束したのだから。

帰りの会が終わり、挨拶もそこそこに図書館へ向かった。本条先輩と待ち合わせていた。木曜日までに用意する、一年生学年集会に関するレポートの感想と、今後の評議委員会について少し話をする予定だった。

大抵はその後、本条先輩と別の教室でだべることがほとんどだった。上総が多人数でいるのを好まないことを勘付いてくれたのか。口ではそう見えなくとも、本条先輩の決めこまやかな心遣いに感謝していた。

本条先輩はいなかった。

三年A組の前を通ってきたけれども、まだ帰りの会は終わっていないようすだった。

図書館にもいなかった。

窓際の、誰も座っていない机を我が陣地にしたのち、上総は『グレート・ギャツビー』の新しい訳本を探し、本棚の林をさまよった。

「あれ、りっちゃん」

声を掛けられ振り向くと、南雲がにこにこしながら手を振っていた。

「南雲。図書館にいるなんてめずらしいな」

「そうか？ まあそんなもんだ。お前こそどうしたんだよ」

「評議の関係でちょっと、本条先輩と打ち合わせなんだ」

「あれ、じゃあ、清坂さんはいないのか？」

「いつも一緒にいないとおかしいか？」

とうとうきたきた。上総はあきらめ気分で答えることにした。

南雲だって言いたくてならなかったのだろう。

「そうじゃないけどさ。それにしてもさ、夏休みの合宿でそろそろ、委員長に関する内定がでるんだよなあ。俺も胃が痛いよ」

南雲には自分にあった委員会を選ぶべきだったのではと行ってやりたかった。シャギーにそいた髪型で、制服も少々崩し気味。そんな南雲は二年連続の規律委員である。次期規律委員長に選ばれるのではないかとの噂が流れている。

大抵、委員長候補はどここの委員会でも、夏休みに『教育』と称する精神的しごきが行われる。しごき、という言葉は悪いが、要は現委員長が、次期委員長に対して過去の経験を語りまくる

というニュアンスのものだった。

規律委員会というと、めがねをかけたいやみな優等生の役割とされているようだが、何のことはない。南雲が言うには、

「意味不明な校則を、学校側に改めるよう交渉するのが仕事であって、守らせる仕事じゃない」のだそうだ。もちろん遅刻玄関チェックなどはするけれども、大抵大目に見るようにしているという。青大附中で遅刻を三回すると、チケットが切られてしまい担任との面談が待ち構えている。

南雲は主に、

「お前そろそろちょっとやばいよ」

と忠告する役割にとどめていた。締め上げているところを上総は一度も見ることがない。

「内定か。もう規律委員のほうは南雲に決まっているようなもんだって聞いていたよ。どうなるんだろうなあ」

「何言っているんだよ。りっちゃんだってそうだろう。来年の評議委員長はお前で決まりじゃないかって、うちの委員会でももっぱらの噂。本条委員長の懐刀といわれているじゃないか」

「誰が言った、そんなこと。俺は毎日本条先輩に怒られているよ。まさかそんなことあるわけないだろ」

本当はわかっていた。

おそらく来年は評議委員長をおおせつかることになるだろう。

同期の評議委員もみな納得ずみだった。

どうしてかわからないけれども、

「立村ならば委員長で問題ないんじゃないか」

という結論に達したらしい。あとは今年の夏休みに行われる委員会合宿で、本条委員長からの内定をいただくのみとなっている。内定式という形ではなく、現委員長がなんらかの方法で伝える。

「ずっと思っていたんだけどさ、南雲。どうして規律委員会なんて硬いところを選んだんだ？ どうみても、お前、らしくないよ」

「知らないのかな、りっちゃん。規律委員会の外部活動を」

南雲は相変わらずにこにこしながら続けた。

「規律出身の先輩たちはなぜか、ファッションセンスにうるさい連中ばかりなんだ。普段制服をチェックすることになれているから、なおさらなんだろうが。だから、暇があれば駅前の洋品店を覗いてファッションの研究にいそしむのさ。やたらと絵がうまい奴とか、モデル並にスタイルばつぐんの子とかいるだろ」

意味は通じた。

「なるほど、青大附中のファッションリーダーってわけか」

「その通り。表は先生の言う通り、バッチをつけろとか、スカートの丈短くしすぎるなとか鬻盛

買うこと言っているけれどな。ちゃんとコピー機を使いまくって、『青潟大学附属中学発信ファッション通信』を発行しているってわけ。あ、大丈夫だよ。どうせ先生にもばれているんだからさ。ちゃんと職員室にも配っているから」

「同人誌作りのようなものか」

「とも、言うな。でもさ、評議だって同じだろ。文化部の行事をほとんど網羅している謎の集団だって言われているし。生徒会よりも、評議委員会の方が力強いというのは、かなり怖い現実だよ。先輩たちにも、『評議とはうまくやっておけ』って言われているしな」

「よくわかった。俺も今の話で、規律委員会とうまくやらなくてはならないことがよくわかったよ」

「ふうん、なぜ」

手招きして上総は南雲にささやいた。

「演劇関係の衣装担当として、協力参加ってというのは」

きょとんとしていた南雲。

ゆっくりうなずいた。

「なるほどね、さては去年、相当苦労したと見える」

「『忠臣蔵』なんてやらせる学校、青大附中以外にどこにあるってさ」

しばらく南雲とたわいもない話をしつづけていた。たまたまこうやって別の場所で顔を合わせると、南雲は上総のことを『りっちゃん』と呼んだ。

他の連中から大抵苗字を呼び捨てにされていた。

決して名前では呼ばせたことはない。

もし冗談でも声を掛けられたら、一生口を利くもんか、そのくらい徹底していた。

一年持ち上がりのクラスだから、前から話はしていたけれども、たまたま所属するグループが異なったこともあり、親しかったわけではなかった。

貴史とどうも波長が合わなかったらしいのだ。

おおまかにD組男子は三グループに棲み分けられていた。貴史が中心となっているグループに上総は一応、位置している。南雲のいるグループは隣のC組連中と重なっていて、『規律委員会』の裏活動のごとく、最新ファッションにうるさい連中が揃っていた。バンド活動に燃えている奴も混じっているためか、ハードロック関係を愛好する集まりのようにも見えた。

評議委員である立場上、上総はできるだけどのグループにもつかず離れずできるようにしていた。貴史たちのかもし出す雰囲気は嫌いなわけではないが、南雲たちのしゃれっ気ある集まりもなかなか楽しいものがあった。ただ、貴史がいい顔をしないこともあり、一年生の頃はそれほどおしゃべりしたわけでもなかった。

二年に上がってからだった。男女同じ委員同士の班構成ではなくなり、単なるくじ引きで決まるようになり、たまたま上総と南雲は同じ班となった。評議委員会、規律委員会との次期委員長候補ということもあって、ちょこちょこしゃべることが多くなった。

南雲の方が上総に、強く好感をもってくれていたという印象の方が強い。

上総としては、それなりにあわせていた程度だったのだが、南雲の方が一方的に『りっちゃん

』と呼びかけるようになっていった。もっとも、教室では絶対に苗字のままだ。羽飛貴史との付き合いも考えてのことらしい。

——小学校の頃だったら、ひどいめに合わされていたタイプの奴じゃないか。

最初はそう、危惧していた部分もあった。

慣れていくにつれ上総もだんだんやわらかい話題を増やしていった。奈良岡彰子との恋物語しかり。内面は見せないようにしていたけれども、南雲にはそこまで言わなくても追求されないですんだ。また納得してくれているような暖かさも見え隠れしていた。貴史や美里とは違った側面のものだった。

そっと心配してくれている、いわば兄、姉のようば部分があるのに対して、南雲の場合は同じ地平で話ができる弾みのようなものがあった。ボールを投げれば同じ力で跳ね返されてくるような、心地いい弾力。

それゆえだった。『理科室の告白事件』では、できる限りのことをしようと決めた。

南雲の気持ちも、言われてしまった奈良岡の気持ちも、理解できたわけではない。でも、ひゅうひゅう言われるのはもういやだろう。

——もし俺だったら。

「本条先輩、遅いな、まさか忘れて帰ったなんて言わないだろうな」

十分くらい南雲と話をしていたが、本条先輩の来るけはいはなかった。同じクラスの三年生が図書館をうろうろしているのに、肝心の本条先輩が来ない。上総が一、二分待ち合わせ場所に遅れただけでもどつくくせに、どうしたのだろうか。

「りっちゃんと本条先輩はうまく行っているみたいだな」

「お前のところはそうでもないのか？」

「まあまあ」

言わずに南雲は回りを見渡した。誰かがいるのを注意しているかのようだった。狼めいたシャギーの髪型が、アイドル歌手に似ているのだそうだ。こうやっていると、南雲は犬系の動物に似ていると思う。

「秘密を聞きたいみたいだな」

「鋭いな。何はともあれ、りっちゃん。今日、クラス妙だと思わなかったか」

まじめな顔で、鼻をこすりながら南雲は尋ねた。

「うちのクラスのことか？」

「まあもともと、妙なクラスだもんな。りっちゃんも落ち着かなかったようだし。俺とかにも聞きたいことがあるんじゃないかな、とか思ってさ」

何を言いたいのだろう。上総は、指先を本の間にはさみこみ、その痛みでもって考えた。果たして自分が今、考えていることと同じなのか、それとも別なのか。うっかり変なことを口にしてしまったら、仲のよい南雲といえどもどう考えるかわからない。

「たとえばどんな」

「うーん、そうだなあ」

南雲はしばらく言葉を選んでいるようすだった。こめかみをつんつんつつき、本に目を走ら

せた後、

「話変わるけど、お前今でも杉浦さんのこと好きなのか」
いきなり関係ない話を持ち出した。

悪夢だった。思いっきり本に指をはさみこみ、抜いて、紙で指をすってしまった。痛くなり、すぐにハンカチを探した。動揺してしまったのを、南雲に見られてしまった。

杉浦加奈子。

「なんでいまさら古傷をえぐるようなこと言うんだ、南雲」

真冬の悪夢だった。上総にとって打ち消してしまいたい記憶の塊が杉浦加奈子だった。思い出すだけでも本気で泣きそうになる。二重、三重に恥が塗りたくられていった、冬の日を上総はたぶん、一生忘れないだろうと思っている。冷静に上総は答えた。

「あの頃のことについてはもう、俺は何も答える気はない。皆が思っているとおりに、思ってもらえればいいから」

「ふうん、そうか。皆が思っているとおりにか」

身を乗り出すようにして、南雲はさらに畳み掛けた。

「詳しいことは、聞いているだろう。そういうこと」

きっと南雲には、自分が同じクラスの女子、杉浦加奈子に告白し玉砕したという話が伝わっているのだろう。他のクラス、下手したら二年、三年の先輩たちにまで知られてしまったことなのだから、D組の南雲が知らないわけがない。誰もからかわないでくれたのは、今でも謎のまま。でも、覚悟をしていたことだから上総は受け入れていた。加奈子が戸惑うような表情で上総の方を避けるようにしているのも、事実だとみんなが思っている証拠のように見えた。

本当のことを言う必要は、ないと思っていた。

南雲はそんな上総の考えを軽々と読み取っている、そんな顔をした。

上総の感じたボールを上手に跳ね返したまなざしだった。

決して痛くないものだった。

「杉浦さんに惚れた立村が何を考えたか、呼び出して付き合いをかけてみたのはいいが、杉浦さんには彼氏がいたと。だからあっさり振られてしまったものの、二度、三度としつこく追いかけたものだから、杉浦さんも困りきってしまったと。で、とうとう他の組の女子に助けを求めたと。まあ、俺たちが最初に聞かされた話はそんなもんだった。確かに、最初はびっくりしたよ。あの立村がなあ、って。普段りっちゃんって、女子のこととか関心ないような顔しているしなあ。って。だから、かなり驚かされたよ」

「悪かったな。なんとでも言えよ」

「で、一時期は女子にも無視されそうになるしな。清坂さんと古川さん、あと彰子さんくらいだったか。まともに話してくれたのはさ」

「自分の相手を名前で呼ぶのはやめろよな」

「お前だって『清坂氏』って呼んでいるだろ」

「癖だよ。一年の頃の名残さ」

なんで南雲がいきなり、思い出したくもないことを持ち出したのか。とまどいながらも上総は必死にボールを返した。ずっと凧いでいた海が、南雲の一声で荒れ狂う合図なのだろうか。堤防が切れる寸前の自分がいた。

何かの拍子に泣きじゃくってしまうかもしれない。

小さい頃から上総は『泣き虫』と言われてなぶられてきた。泣かないでいられる自信は正直なかった。一人でいる時以外は絶対に涙をこらえていた自分なのに。みっともないところを見せたくはない。

普通に聞こえるぎりぎりの声。上総はゆっくりと答えた。

「でも、それでも、D組の奴は、いい奴だと思えたからそれが救いだよな。地獄を一度覗くと、もう怖いものなんてないからさ」

「どうしていい奴だと思った？」

口にするのをためらい、さらにゆっくりとつぶやいた。

「D組の教室では誰も、俺を責めたりしなかったからさ」

「なんで責める必要あるんだ？」

「確かに俺のしていたことは、嫌がられることだったんだろうし。気付かなかった俺もばかだったから」

「気付いていないのは別のことだよ、りっちゃん」

南雲はひょいと立ち上がり、ぱかっと笑顔で答えた。

「悪いけど、今言ったこと、少なくともD組の野郎はこれっぽっちも信じていないよ。そう思われていると信じ込んでいたのは、りっちゃんだけだってことだな。よくもさ、今日までだまされていたよな、驚いたよ」

「どういうことだよ、南雲、ちょっと待て」

「あとはみんな、本条さんに話しておいたから、直接聞けよな。とにかく俺が言いたいのは」

ネクタイをゆるめたまま南雲は片手を上げて去り際、

「りっちゃんが思っているよりも、立村上総はいい奴だってことさ」

思わず声をあげそうになり、押さえこむだけの理性は保っていた。

上総はしばらく、この学校でめったに呼ばれなかった、自分の名前の響きを耳に残していた。男とも女ともつかない『かずさ』という響きの名。

南雲から発せられるとは、思わなかった。

本条先輩が現われたのは、南雲と入れ違いだった。

あきらかに南雲と本条先輩は何かを隠している。もちろん、

「あとはみんな、話しておいたから」

と答えたところをみると、上総に話してもかまわない内容なのには違いない。

全く先の読めない会話だった。

規律委員会が『隠れたファッションリーダーの集まり』ということを見ると、同じく洋服のセンスはかなりいい本条先輩が目をつけないわけがないし、評議委員会としてもそれなりの付き合いはあるだろう。しかも次期規律委員長候補というのは、現評議委員長の本条先輩としては積極的に接触したい相手だったに違いない。

——でもなぜ？

名前を呼ばれた軽いショックから抜け出せないまま、上総は立ち上がった。頭を下げた。

「さっきまで、規律委員の南雲と話をしていました」

ぼぞっと、それだけ言った。

「規律委員のくせに、口は規律できないとんでもない奴だな」

「悪い奴じゃないですよ。ただ、今の話はよくわけがわからなかった」

上総の言葉遣いが、どこことなく投げやりだったのに気付いたのだろう。本条先輩は銀縁めがねをはずし、生の目で上総を見た。

「何言われたんだ」

「言いたくないです。あとは本条先輩が話してくれるからといって、去っていきました。さっき、すれ違いませんでしたか」

「いや、残念ながら」

とぼける気なのだろう。上総はあきらめた。本条先輩に逆らおうとすること自体が無理だ。むしろ本条先輩の思考回路を自分のものにしてしまい、これからどうすればいいかを考えよう、そう思った。

何はともあれ、明日の評議委員会についての予定を確認し、反省点の発表を行うことを決めることになった。一年生の今後についてとかいろいろ問題は山積みだった。夏休みの合宿についても、顧問の先生にどう要求を提出するかという問題もあり、しばらくは評議委員として話しつづけていた。

「と、いうことで、あとはなりゆきだ。さて立村」

「とうとう来ましたか」

こういう出だしの時は大抵、下ネタでつつこまれるのが見え見えだった。

「今日で三日目となるが、どうだ、まだ平気か？」

「何考えているんですかまったく」

露骨にいやな顔をしてしまい、すぐに反省した。感情がまだ自分でコントロールできずに

いた。

「遠慮なく言えよ。鼻血が出そうな時もあるんだろ」

「本条先輩じゃあるまいし」

この前返した、グラビア写真集のことに違いない。

手放して、一人遊びができなくて、眠れぬ夜を過ごしていると思っているのだろう。全く外れているといえないのが悔しいが、顔に出さなければそれですむ。

「ああ、それともな、もしかしたらお前、本気でなまを知っているとか」

「なま？ なんですかそれ」

本条先輩の言葉は、抽象的概念が多くて戸惑うことがある。委員会の時には論理的なのに、どうして下ネタの話題になるとぼかすのが上手なのだろう。上総はその辺ついていくのが大変、骨だった。

「でもなあ、相手がまずかったな。清坂じゃあ、口説くなんて無理だろう」

「だから、なんでそういう話になるんですか。南雲にしろ本条先輩にしろ、俺に見えない話題を振るのはやめていただけませんか。ご存知の通り、俺は数学的な部分の能力がかけているんですから。付いていくのが困難だって、知能テストの時に指摘されています」

——やはりこれか。

本条先輩につっこまれたら、もう逃げられない。

覚悟しなくてはならない。

清坂という苗字が、本条先輩の口から出てきた段階で、上総はあきらめた。

してやったりと、本条の表情がやわらぐ。

「俺も無理やり聞くようなことはしたくない。言えることだったら、立村、お前の方から言っちゃまえ」

雨音の響きが激しかった、午前の茶室。

ところどころ本条先輩に質問されながらも、大まかなことだけは話した。

たまたま茶道の授業があると思い込んで、評議委員同士で茶室に向かったはいいが、茶室には誰もいなかったということ。

たまたま雨が土砂降りになったこと。

濡れなくなかったので、ほんのひと時だけ雨宿りしたこと。

でも、誰も何も言わなかったこと。

「要するに、俺が勘違いして茶室に行かなければこういうことにはならなかったってことですよ。幸い、自習だったからまだ他の組にはばれていませんが、全く面目ないです」

「清坂と、大体三十分くらいふたりだったのか」

「そんなに長くないですよ。二十分くらいかな。一瞬の大雨だったし、すぐにやむだろうと思ったからです。ただまずいなとは、思いました。大抵クラスでなんやかんやからかわれるのが目に見えていますからね」

「二十分あれば、することは一通りできるしなあ」

「だからどうして本条先輩はそういう発想しかできないんですか」

「じゃあ聞く。立村、お前は清坂にむらむらっとこなかったのか？ 嘘を言うなよ」

上総は即答した。

「きません。全く。その辺は本条先輩と違います、女子だから誰でもそういう目で見ると決
め付けないで下さい」

「じゃあ、立村は清坂のことが好きじゃないんだな」

「だからどうして」

再び言い返そうとした上総を、軽く手で押しとどめた。

「白状しろ。清坂と、何か、あったな」

上総の表情がすべてを物語っていたのだろう。

押し黙る上総に、本条先輩はしばらくじっとみつめていたが、思い切ったように口を切った。

「付き合い、かけたのか」

「そういうわけでは、ありません」

「かけられたのか」

黙るしかなかった。

「清坂だったらそれはしかねないよなあ。そうか、で、それはいつだ？ あ、そうか、日曜日前
であることは確かだな。金曜か、土曜か」

「そんなのどうしてわかりますか」

「だってな、お前の悩みよう尋常じゃなかったぞ。立村。お姉ちゃん本を返すとか言い出すしさ
。何かがあったとは思っていたが。やはりそっちの関係だろうなあ。もしかして、清坂に迫られ
たんじゃないか。キスしてくださいとか言われて」

「そんなわけないでしょう！ 想像力を発揮するのはご自分の相手だけにしてください」

「でも、お前のことだ、キスのしかたも知らないくせに……」

「知識はありますよ。実践経験がないだけです」

「向こうの方がうまいに決まっている、なにせ付き合い合ったことがあるはずだから、そのくらいは
あるだろうしな」

「悪いですか」

「別にそれが悪いとは言っていないだろう。立村。お前ももう少し大人になれよ。要は清坂と心
たりになりたくてならなかったんだろう。だから、茶室に誘ったんだろう」

「だから誘ったんじゃないんです。茶道の授業準備に行っただけなんです。本条さん、何度言え
ばわかるんですか。確かに、そういう話が出たのはあります。でも、何でいきなりそんな話まで
進めてしまうんですか。第一、付き合い、付き合いもないって一体なんなんですか。本条先輩」

とうとう堤防が崩れた。涙の代わりに自分が饒舌になるのがわかる。

まだ、何も始まっていないのに。

たまたま『つきあっちゃおうか』という言葉を受け止めたただけなのに。

『つきあう』という言葉がいやだった。

ずっと目を背けてきていた。

本条先輩のような付き合いなんて絶対に出来ないと思っていた。

そのくせ、裏側では写真集の少女を恋しく思う自分を見る。

美里にそういうことを感じたことはない。それはそうだけど、もし写真集の少女に向ける激しい感情を向けてしまったら、もう自分は理想の自分でいられなくなりそうだった。茶室でいきなり抱きついてしまうような人間には絶対になりたくなかった。

すべてがつながる、『つきあう』という言葉。

噛み砕いて、吐き出してしまいたかった。

あまりにも苦かった。でもそれができなくて、さらに迷う。

美里の好意を素直に受け止めたくて、震えている自分もいる。受け止めたとたん、すぐに「やりたい」「抱きたい」と感じてしまう自分がある。そんな自分を遠ざけたかった。

「あのなあ、立村、勘違いしてないか。付き合うっていうのはな」

まくしたてた後、脱力してうつむいた上総に、本条先輩はしばらく間を取った。

「何もすけべなことしたりすることじゃないんだからさ。もちろん、俺とかは『つきあう』という言葉のセットに、すべてオプションとして入れているよ。でもな、何もお前がそれを最初っから意識して、逃げることはないだろうよ。ぶっちゃけた話、相手は清坂だろ。もう、入学した時から『つきあっている』ようなもんだろ。お前がどう考えているかはわからないけどさ。一緒に歩いたり、しゃべったり、いろいろあつただろう。で、たまたま、清坂が気付いて、『つきあって』とってくれたと。別に今までどおりの感じでも変じゃないだろ」

「じゃあ、なぜいろいろ騒がれなくちゃいけないんですか。その辺も俺にはよくわかりません。今までどおりでいいならばなおさらでしょう」

「それはオプションが必要だったからだろ。でも今の話聞いていると、清坂もお前も、まだ標準設備で十分みたいだしな」

自然と手がこわばってくる。上総は唇をかみ締めた。

「ただ、な。俺が思うに。付き合っていることは早いうちに白状しておいた方が楽だと思う。これは俺の経験上言えることだ。特に清坂は、俺たちの代で非常に人気があるから、狙っている奴がいなくても限らない。それにお前も、早いうちにけしておきたい、過去があるだろ？」

「思い出したくないことを、先輩も思い出させようとするんですか」

いまいましい。杉浦加奈子との玉砕告白事件を、本条先輩も持ち出そうとする。

「事実の方が嘘よりも説得力がある。いやな、さっき南雲と話していて、やっと納得した。やっぱりお前、早いうちに清坂と付き合っ、例の噂を帳消しにしたほうがいいと思う。どうせ、嘘は本当のことに負けるんだからさ」

南雲の口にした言葉と重なっていった。だんだん耳の奥からすうっと牽いていく音が聞こえて

いく。上総は南雲と話していた時以上に低く、つぶやいた。「どういうことですか、その嘘っていうのは」

「好きでもない女子に、してもいない『玉砕告白話』なんて、消しちまえ」

ポケットからかたかたと、カセットテープを取り出した。

「あとはこのテープを聞いて、お前の身の周りがどういうことになっているかを、よく確認するんだな。本当にお前、ガキだよ。ガキだから、守られているんだよ」

最高に『抽象的』な言葉を残した後、本条先輩は立ち上がった。

「行くぞ、立村。ちゃんとカセットレコーダーも用意してある」

カセットテープを急いでポケットにつっこむと、上総は急いで立ち上がった。白い羽織のジャケットだった。外はだんだん薄墨色の闇が濃くなっていた。

自転車で急いで帰らなくてはならない、急ぐ心と同時にカセットテープの箱が重く感じられた。からからと音がする。何かがせかしている。そんな気がした。

本条先輩とは、自転車置き場で別れた。

小型のカセットレコーダーをぽんと渡してくれた。

「明日、委員会の時返せよ」

はいとも答えられずに、上総はうなずき見送った。

雲の裾が銀色に染まり、やがてひたひたと生ぬるい空気が広がっていく。

自転車に乗っている時は風で溶かされているせいか気付かずにいるけれども、信号で止まったりした合間に、じわりと汗がにじんできたりする。

品山に帰るまでには、まだかかるだろう。

空は、持ちそうになかった。

携帯傘も今日は持ってこなかった。

自転車で走るほうが楽だから、当然といえば当然なのだが。もし駅前近辺にいたのなら、本屋に立ち寄ったりするのだろう。上総の知っている町並は目に入っていた。中途半端な知り合いの多い道だった。近くにはファーストフードの店も見えるけれど、雨宿りはしたくなかった。小学校時代の知り合いがいなくても限らない。別に自分が悪いことをしているわけではないけれども、できる限り顔を合わせたくない連中がいるのも確かだった。

上総は見渡した後、自転車を降りた。同時に雨粒らしきものがぽつりと頬にかかった。見上げた拍子に雲の全身は黒い銀色に染まり降り注いできた。

夕立だった。

通りすがりの人々も急ぎ早に軒下を探して走っていた。集まった場所は近くの、バス停留所だった。半そで姿の高校生、中学生がみな、ばたばたと雨のしのげる場所を見つけてもぐりこんでいた。急いで上総も自転車をひきずってもぐりこんだ。舗装されているのはバス道路だけ、目の前に広がっているのは、まだ放置されたままの住宅地だった。まだ青々とした叢が、道路越しに広がり、お辞儀をしていた。ばさばさと打ち付けられるような音をさせている雨。

雷が落ちないといいけどな、ぽつりとそうつぶやいた。

ポケットにつっこんだままのカセットテープを取り出した。

時間つぶしに、というふうに、カセットレコーダーにはめ込んだ。

目線を道路越しに向けたまま、上総はイヤホンをつけて、再生ボタンを探った。間違っても録音ボタンを幼いように、指先で確認しながら、でも見ないように。

じいじいと響く雑音に混じり、声が聞こえた。

カセットテープの中では、ふたりの声だけが、はっきりと聞き取れた。

雨の音にも消えずに、聞こえてきた。

本条先輩と南雲のふたりがたりだった。

「……要するに、うちのクラス、つまり二年D組は誰が仕切っているかということ、本当は立村なんです。りっちゃん。絶対そうなんです。ただ、行動したり発言したりするのは羽飛なんです。立村がああしたらどうだ、こうしたらうまく行くとか言っているいろいろ考えてくれているんですけど、じゃあこうしよう、と言って片付けようとするのが羽飛。あの二人は馬が合いますから、役割分担はうまくいっているんでしょう。きっと。でも、本条先輩、ここからが重要なん

ですが、D組で立村の存在感は薄すぎます。真面目だし、いい奴だから野郎はみな納得していますけれど、女子がなあ。いまひとつなんですよ」

「あいつが女子受けしないのはそういうことか。で、不幸な失恋ばかりしているってわけか、なるほどね」

「なんすか、その不幸な失恋って」

「有名な話だろう、D組のおとなしそうな子に立村が手を出してこっぴどく振られたって。何血迷ったのかわからんが」

「ああ、杉浦のことですか。あれはちょっとばかし、立村が不幸すぎますね。話そのものがあまりにも捻じ曲げられていますからね。どうしてあいつは自分で言い返さないんだろうと思いますよ。全くのでたらめなんだから」

南雲は杉浦加奈子のことを『杉浦』と呼び捨てにしている。

女子受けするタイプの南雲はみな、丁寧に「さん」つけをしているというのに。

どうして南雲がD組の状況を本条先輩に説明しているのだろう。

雨音と一緒に振るわせて、心に落とし込んだ。

「あくまでも羽飛の話信じればですがね。立村はたまたま杉浦の関係で何かがあって、それ以来ひどい嫌がらせを受けているらしいってことです。詳しいことは知りませんが、女子がなぜ野郎にそういうことをしようとするのかが俺にはとんと理解できません。こういう問題こそ、規律委員会の出番なんでしょうが。なにせ、証拠がありませんからね」

「単に惚れて振られて追いかけてって話じゃないのか」

「あいつが好きな女子を追いかけて口説いてさらに追いかけるなんてこと、するようには見えなし。いくら人は見かけによらないとはいえ」

「実践している南雲の言葉は確かに重い」

「杉浦も顔に似合わず汚い女だと思いましたね。俺は女子にルックスを求めなくなり二ヶ月になりますが、とにかくやり方が汚いですよ。なにが、『立村くんにしつこく迫られている』だって。C組の女子を固めていって、そこからD組に情報を流して、最後に菱本先生に話を持っていくって方法を取ったらしいです。あいつ、相当ひどく絞られていましたよ」

「濡れ衣って奴だな」

「だからどうして言わないんだろうと思いますね。腹が立ったら言ってしまえばいいのと思うけれど、その辺が立村の立村であるべきところでしょう。結局噂はあっという間に消えましたからね。ただ、女子にひどい目で見られるようになったのは確かです」

どうして南雲はそこまで知っているのだろうか。

確かに、南雲の言葉に嘘はなかった。

杉浦加奈子から流されたデマを、黙って受け止めてきた。

よく知らない女子たちから、

「なんで立村くんがそんなことするわけ？」

「いやがる女子を追いかけるなんて最低だわ」

と陰口を叩かれても、菱本先生に呼び出されて厳しく叱られても、上総は言い返さなかった。認めもしなかった代わりに、言い訳も抗議もしなかった。

クラスで再びいたぶられるはめになってもいいと思っていた。小学校時代、自分を傷つけてきた連中に頭を下げるくらいだったら、もう一度一人ぼっちになってもかまわない。覚悟はできていた。

「お前らじゃあ、どうして本当のことを知ることができたんだ？ その杉浦って子は、頭の切れるタイプらしいし、野郎たちもあっさりだまされてもおかしくなかつただろうしな」

「本条先輩、年下だからって見くびるのはやめましょうよ。つまりですね、俺たちはその話が出た段階で、立村という奴の性格を大体把握していたわけなんです。何かあったらすぐに自分の中にしまいこんでしまう、自分でがまんすればすべてことがすむとわかればあきらめる。とにかく人のことばかり気を遣っている。まあ並べればそんなことですよ。自分のすることをうまく隠して、相手にみんな手柄を譲るようなところがあるんです。物笑いにしたいと思う、タイプの人間ではないですよ。たぶん立村じゃない奴だったとしても、うちのクラスは味方になってやろうと思うでしょうよ」

「なんて、美しいクラスなんだ！ ある意味、怖いところもあるなあ」

「いや、これ本気で。うちのクラスって男子に関しては妙に団結力がありますよ。女子はどうかかわらんが。普段だったら立村が自分で采配を振るって、ある程度の手回しをするんでしょが、今回は自分のことですからねえ。あきらめていたんだと思いますよ。それでさっそく、羽飛が女子の方からいろいろ詳しい話を聞きだして、俺たちにこっそり教えてくれたんですよ。連絡網を使うんですよ。俺たちの場合」

「連絡網、なあ」

「だいたい状況が判明したので、羽飛が仕切ることになり、『このことは全くのでたらめだけど、噂は消せないから、俺たちだけでも立村の味方になってやろうか』という結論に達したと」

「おい、誰かその杉浦とかをつぶそうとかは思わなかったのか」

「それはなかったですね、女子に噛み付くようなことは誰も考えなかったし、第一に羽飛の考えとして、『立村には内緒にしておかなくてはならない』っていうのがあったようですから。かえって気を遣わせてしまうということだったみたいですよ。いやあ、うちのクラスに限って言えば、緘口令ぴっちりでしたね。あいつ、たぶん今でもそういうことがあったなんて知らないんじゃないんですか」

——羽飛がなぜ。

髪の毛から滴る雨。

上総は額をぬぐった。冷たい水滴が、手の甲に染み入った。

「ただね、本条先輩。ここからが本音なんですけどね。俺が思うに羽飛のやり方はあまりにも、あまりじゃないかという気がするんですよ。だって、立村は自分の情けない過去が、俺たちD組の連中にばれればだと思い込んでいるわけなんです。俺がもし、あの立場だったら、地獄だと思うだろうなあ、って思いますし。まあ、最近も自分で経験しましたからね」

「ああ、『理科実験室の告白事件』……」

「笑ってやってください。まあやったことは後悔していませんよ。惚れた相手がたまたま一般受けしない相手だったってこともまずかったんでしょうけど。言ったことよりも、ばれたことの方がショックでしたよ。相手は混乱しちゃうし、誤解曲解されるし。でも、立村が……、そうそう、立村と同じ班なんでしゃべるんですけどね。『一番いい形になるようにするから』って言ってくれたんですよ」

「これだけか？」

「そう、それだけです。たぶんあいつのことだから裏でいろいろ女子に手を回してくれたりしたんだろうなあ。彰子さんからあとで聞きました。とにかく、俺がいかにも真面目で規律委員の誇りのような人間であるかどうかを、うちのクラスの野郎がみな、切々と伝えてくれたらしいです。恥ずかしくなりますわな。もともと見た目が俺、こうですから、本気では受け取ってもらえませんから。とにかく立村のおかげで俺は両思いになれたってわけです。あ、本条さん、これは俺だけの話じゃないですよ。うちのクラスの場合、他人の恋路は応援するという『紳士であれ、淑女であれ』という校訓が徹底して生かされていますからね」

「うらやましい、俺なんて『近寄るだけで妊娠するぞ』と言われている。失礼な」

「本条先輩くらい遊び人だからしょうがないでしょう」

ずいぶん南雲も本条先輩に言っているものだ。

さすがにここまで言い放つ自信はない。

思わず早回しボタンを押してしまいたくなった。

「でも、これが誰も知らない場所で行われていたとしたら、不気味でしょうなあ。俺はいやですね。どんなに善意であったとしても。だからこそ、俺は羽飛の親友ぶったやり方にむかついてしまったわけなんです。確かに仲はいいだろうし、それなりに知っていることもあるんでしょう。立村の性格もよくわかっているからでしょう。でもなあ、一言くらい言ったっていいんじゃないかと思えますよ。俺たちはお前の味方だって。でないと、あいつのことだ、ずっと杉浦への告白事件を引きずることになってしまいますよ」

「いまだに、委員会内でも本当のことだと思っている連中が多いからなあ」

「たぶん他のクラスも、そのことはまだ事実だと思っていますよ。D組だけでうまくいかせるよりも、はっきりと杉浦を告発の方がずっと、ためになると思えますよ」

「確かに、でも証拠がないんだろ」

「そう。肝心要の立村が言い訳しないからです。無理でしょうな。ただ、どういうことが起こっているかくらいは知りたいと思えますよ。うーん、だから、俺は羽飛のやりかたを見ているとい

つも頭にくるんですよ。いかにも親友面したやりかたってというのがね。自分を犠牲にしているような顔つきして、俺たちに強要するっていうんですか。だから俺も今回は思いましたよ。また似たようなことがあったら、立村にすべて教えてやろうってね。ずっと生ぬるい感じで、自分を恥じつづけなくてはならない立村の気持ちが、なんとなく、俺にはわかるんですよ。羽飛は気付いていないかもしれないけれど、やはり経験者としては、辛いですよ」

「で、似たようなことが、最近起こったというわけか」

「そうです、さっき話した、例の『茶道授業謎の空白二十分事件』です。土曜にも立村と清坂さんは、音楽室で十五分くらい時間つぶしていましたから、みな影でいろいろ噂はしていました。もともとあの二人、できているという噂、前からありましたからね。ただ、例の杉浦疑惑があった関係で立村も言えずにいるんじゃないかとか、羽飛のことも絡んでいるから気を遣っているんじゃないかとか。立村が清坂をむちゃくちゃ意識していた様子なのは、見え見えでしたよ。りっちゃんは隠していただろうけれど。決定打が月曜日です。茶道の授業の準備で出かけたと本人は言い訳していましたよ。手にはふくさとか、茶碗とか抱えていましたから。本当にそうだったかもしれません。でもまあ、俺たちとしてはこの辺であの二人をハッピーエンドにしてやった方が、いいんじゃないかという結論に達したわけです」

「思いやりのありすぎるクラスだな。普通だったら思いっきりからかいまくってやるんだが」

「立村の性格でしょうね。あまりしつこくしてしまうと、自分で自分をだめにしてしまいそうな感じなんです。それ、羽飛もそう思っていたみたいですよ。一年から二年にかけて、立村に世話をかけてしまった連中が、うちのクラスほとんどですからね。この辺で恩返しといたら変ですが、『あったかく』見守ってやろうか、という話を、茶道の自習中にしていました。男子に関してはその辺、誰も反論はなかったです。ただ、女子は妙な顔していましたが。杉浦を追い掛け回していたら今度は、清坂さんを狙うなんてなんて女ったらしなんだろうという感じなんでしょうね。なんとなく、女子は清坂さんと羽飛をくっつけたがっている目線だったしなあ」

「それは自然の反応だろう。俺もあの二人は出来ていると疑わなかったが」

「ですよ、本条さん、俺もそう思います。だからなんだよなあ、俺、しつこく羽飛の悪口話していますよね。『自分が惚れている女子を親友に譲って酔っている』ような態度っていうんですか、それがなあ、どうしようもなくいやだったんですよ。で、今回もやはり、土曜の夜に連絡網が回ってきました。羽飛発ということで、『例のことはしばらく内緒にしよう』とかいう話でした。別にそれはいいですよ。自然にばれるだろうし。でもな、なんで羽飛がそこまで仕切りたがるんだか。俺がりっちゃんを信頼できるというのは、前もって俺に一言、声をかけてくれたからなんです。あいつはそうですね、影でこっそり仕切ることはしない奴ですね。影でこそこそやられる辛さの方をよく知っているんだと思います。でも、羽飛の場合は、自分に対して異様なまでに自信があるんでしょう。立村には内緒にしろの一点張り。女々しい奴だとか言っているくせに、お前の方こそ、女子とおんなじじゃねえかと、思いますよ。どうでしょう。本条さん」

雨は小ぶりになったとはいえ、まだしづくの縦線が消えなかった。遠方にて落雷が聞こえる。思わず身を震わせる。金属なんて持っていないだろうか。カセットレコーダーを止めようとし

たが、やめた。

額のしめった前髪を、そのままにして空を軽く、見上げた。目に冷気がすうっと入って行って、奥を乾かしているような感じだった。

「南雲、それは意見が分かれるところだから俺は何も言わない。羽飛のように秘密を隠すことが正しいとするか、お前のように相手に話したほうがいいとするか、なんともいえない。ただ、今の話からすると、杉浦との玉砕告白事件だけは早く教えてやった方がいい、気はする。ここで相談なんだが、南雲」

「なんすか、本条さん」

「この話を俺から立村に伝えておくっていうのはどうだ。たぶん、あいつのことだ。同級生からそういうことを聞かされたら、理性がぶっとなで何をしでかすかわからない。羽飛と喧嘩しないとも限らない。あいつは本当に、怒らせたなら何をしでかすかわからないからな」

「そうですね、俺たちよりも、本条さんの方が立村とは親しいだろうから」

「それと、清坂とのことは、もう無理に隠さなくたっていいだろう。どうせお前ら、立村をかわかった時、杉浦のことを打ち消させるようなつもりで、『お前は清坂だろ』とか言っていたんだらうからさ」

「あ……ばれていました？」

「あたりまえだ。普通だったら、杉浦関係のことでもっと引っ掻き回してやっておかしくないだろう。それを、ずっとお前ら、立村と清坂をくっつけようとしていたんだからなあ。無意識かもしれないが、それがお前らなりの、立村への友情表現だったんだらうな」

「意識していますよ。俺に関しては断言します。羽飛のやり方にむかつきつつも、俺たちは、こちらが真実だと思ったら当然そちらを弁護しますよ。すでに杉浦の本性はいろいろなところでばれていますしね。D組の男子では、杉浦を要注意の女子だと認識しています。最低な女だと思えます。もちろんいまさらいじめるなんてことはしませんよ。それこそ『紳士』として、知らないふりをしつつけます。ただ、何かあっても、俺たちは無視しますね。掟を破った奴を、俺たちは許せません。男女関係なく。ところで本条さん、今日の話って、『規律委員会と評議委員会』の今後についてのレクチャーでしたよね、どうして、いきなり立村のことに……」

ばちんと、録音の終わる音が入って、そのあとは静かな雑音が流れていた。

約十分程度のしゃべりだったらうか。

一方的な南雲の語りだった。

からっとした言い方の中に、憤る言葉の数々が耳に残っていた。

羽飛貴史への感情は、隠すところがどこにもなかった。

南雲も自分を紳士として意識しているのか、表立って喧嘩を売ろうとはしていない。きちんと、クラスメートとしての付き合いをしている。でも、本心がここまで煮え立っているとは思わなかった。しかも、自分の恋愛沙汰でないのになぜ、憤るのだらう。

羽飛貴史と清坂美里との間に流れる何かを、感じ取ってしまったのだらう。

自分だけが一年の頃から感じてきた、ふたりへの違和感はそこだった。絶対にふたりには割り込めない、恋とも友情ともつかないつながり。『つきあう』という言葉では終わらない美里と貴史に手を触れるのは失礼だと思っていた。触れる気もなかった。

貴史が懸命に美里とくっつけようとしているのも、まわりが「お前は清坂だろ」

とあっさり認めているのも、南雲のいう通りと考えれば意味は通じた。

精一杯尽くしてきたことが、D組の男子にだけは伝わったということ。

話しても無駄だと決め付けていたのに、上総が望んでいる以上に、精一杯気持ちを汲み取ろうとしてくれていたことだと。

——羽飛、南雲。

上総は手を差し伸べて、雨粒を受けた。一瞬のどしゃぶりは落ち着いたけれども、まだ袖口がぺたりと重くなりそうな粒の重さを感じた。遠くに見える山の上には、白いガスがかかり、裾根まで広がっていた。

十分、今日は、ぬれて帰ることができる。

びしょぬれになって、髪の毛をぬらして帰ることができる。

頬にかかった雨をそのままにして帰ることができる。

自転車のロックをはずし、上総はゆっくりと自転車を引き始めた。首筋に流れるしずくが張り付いたようで、気持ち悪かった。前髪からしずくがまたぼつりと目の中に入った。何かの拍子でそれが目から涙になりそうだった。目尻にも、唇にも滴る冷たいしずくをそのままに、空を見上げ歩き続けた。

あと、十五分。流れるままでいい。

次から次へと、上総の瞳に雨は降り注いでいた。

鬼門の六月だっていうのに。

身体を冷やして家に帰った上総は熱で眠れぬ一夜を明かした。

だるいのと寒気が走るのと。

外は白い光が空に薄く広がるすっきりした天気なのに。

身体を起こすことができなかった。

時間が勝手に流れてゆき、気が付けば八時過ぎだった。もう、どんなに自転車を転がした間に合わないだろう。父が家の中にいたならば学校に欠席の連絡を頼んだのだろうが、とっくの昔に出勤してしまった。

学校では無断欠席と思われるかもしれない。

うつつに見える夢の中で、何度も響いた南雲の言葉。

「何かあったらすぐに自分の中にしまいこんでしまう、自分でがまんすればすべてことがすむとわかればあきらめる。とにかく人のことばかり気を遣っている。まあ並べればそんなことですよ。自分のすることをうまく隠して、相手にみんな手柄を譲るようなところがあるんですよ」

わんわん響いた。何度も身をよじった。

思わず枕に噛み付いた。歯軋りしながら頭を打ち付けた。

「でもなあ、一言くらい言ったっていいんじゃないかと思いますよ。俺たちはお前の味方だって。でないと、あいつのことだ、ずっと杉浦への告白事件を引きずることになってしまいますよ」

杉浦加奈子から流された玉砕告白事件のデマ。

いや、デマというには真実味がありすぎた。

彼女の言うことは正しいと、重々承知していた。

小学校時代に『ちょっと荒っぽいやりかた』で『仲良くしよう』と近づいてきた男子に『決闘』を申し込んだことがあった。

頭を思いっきり叩かれることが、友情表現だとどうしても思えなかった。

かばんをかくされたり、掃除道具入れの中に閉じ込められたりすることも、そいつは『ゲーム』のひとつだと言った。

でも上総にはどうしてもそう思えなかった。

そいつの言ったことが正しいのだろう。

誰も上総の味方にはなってくれなかったような気がした。

自分の感じ方がおかしいという自覚はないわけでは、決してない。

それでも上総は証明したかった。

男子同士、一対一で勝負をつけ、潔くけりをつける方法はひとつしかなかった。担任のいる前で、さりげなく相手の筆箱をわざと落とすこと。手袋を投げつけるのと同じ由来だろう。いつしか『筆箱落とし』は、一対一の『決闘』申し込み手段となっていた。もちろん担任に、その意味はわからない。あえて大人がいる前で、にこだわるのはその場でそれぞれの仲間が手出しするのを避けるためなのだそう。

卒業式一週間前、上総はそいつのカンペンケースを片手でゆっくりつかみ、ぱらりと落とした。散らばったシャープペンシル、消しゴム、定規を一切拾わずにそのまま自分の席に坐った。

意味を知っている男子たちが息を飲み、やがてざわめき立った。

「まさかかよ」

「附属受かったから、頭おかしくなっちゃったんじゃないかねえの、泣き虫が」

耳たぶが熱くなり、心臓が跳ねあがりそうだったけれども、上総は知らぬ存ぜぬで真っ正面を見つめていた。

それからの一週間は、男子、一部の女子の視線を痛いほど感じた。

幸い決闘相手は上総が思っていた以上に紳士的な態度で『決闘』に望んでくれた。意外にも腕力ではなく、土手での自転車勝負をしようという旨の申し出を受けた。サイクリングロード沿いの坂でお互い、自転車をぶつけ合い、どちらが先に落ちるかを競う、他愛のないものだった。

二年前だから、『他愛もない』と言えるけれどあの時は真剣だった。

卒業式が終り、黒いトンビのコートを羽織ったまま上総は精一杯チューニングした銀色の自転車を引き出し、決闘に望んだ。

もし、ここで騒ぎを起こしたことがわかったら、青大附中の合格が取り消されることも、カンペンケースを落とした段階で覚悟していた。

なぜか負けることだけは、想像していなかった。

結果、誰にもばれずに決着をつけた。

計算違いだったのは、そいつを突き落とした瞬間に想像以上の怪我を負わせてしまったらしいということと、相手の態度が最後まで紳士であったことだった。見下ろした後、家に戻った後、いつ学校から連絡がくるか、いつ警察から連絡が入るか。電話をずっと見つめていた。鳴らない電話は、最後まで静かなままだった。

相手は、決闘の掟通り、一言ももらさなかったらしい。

無事に青大附中の入学式に参列できたのは決闘相手のおかげとも言えた。

まさか決闘相手の恋人が、同じD組で待ち受けているとは思わなかった

「立村くん、浜野くんって知っている？ 彼が立村くんによろしくですって。立村くん、小学校

の頃、とっても泣き虫だったんですって」

聞いた瞬間、ふらついて転びそうになった。

身体にも響きが残った。

杉浦加奈子は真っ正面から上総を見据え、やわらかく言った。

「それも彼が懸命に立村くんを仲間に入れてあげようとしたからなのよ」

そうなのかもしれない。

理解できなかった上総が悪いのかもしれない。

謝ることも何度か考えた。

でも、叩かれた時の痛みは本当だった。

鍵をかけられて出られなくて泣きじゃくりながら叫んだ時の恐怖もいまだに消えていない。

かばんがなくなって、夕方遅くまで学校の中をひとり捜し歩いたときの心細さも忘れられない

。

泣き過ぎると、いくら声を出しても涙が出なくなり涙腺らしいところが乾いてだんだん痛くなるということも、経験した。

必死に青大附中を目指し念願の合格を果たした時ですらも、杉浦の彼氏には一言、

「青大附中には、俺の知り合いがたくさんいるんだからな、逃げられると思うなよ」
投げつけられた時、上総は覚悟を決めた。

——殺したっていい。

——死んだっていい。

——こいつを決闘で倒して、小学校から縁を切ってやる。

もちろん杉浦にはそのことを話さなかった。どんなに説明したところで、上総の感じた痛みを理解させることはできないだろう。わかってもらおうとも思わなかった。

杉浦加奈子が出した条件は、

「私の彼に、土下座して謝ってほしいの。立村くんが勘違いして自分のことをいじめられていたと思っていた逆恨みを反省してほしいの。決闘で彼を土手から突き飛ばして大けがさせたことを、ざんげしてほしいの」

謝ってすむものだったらいくらでも頭を下げられる。やっと青大附中で認められてきたというのに、すべてがご破算になるくらいだったらと思ったこともあった。でも上総にとって、杉浦の彼氏と勝負した『卒業式の決闘』は、上総が六年間のうち唯一勝つことのできた、瞬間だった。

いまだ後悔したことはない。

たとえ、青大附中の合格が取り消しになったとしても絶対上総は、悔いないだろう。どんなことがあっても、あの時感じた感情だけは本物だった。

一年の十一月末。

上総と杉浦は最後の話し合いを行った。

本品山中学のグラウンドでだった。

もし青大附属入試をしくじってしていたとしたら、通わざるを得なかった学校だった。

「彼にあやまってくれるのかしら。それとも……」

穏やかな笑顔で杉浦加奈子は上総に尋ねた。

最終通告というのに、言葉に反してあどけない笑顔だった。

ゆっくりと息を吸い、上総は目をそらせたまま言い切った。

「杉浦さんの言うのも正しいと思う。確かに俺は、敏感に感じすぎていただけなのかもしれない。でも、あの時のことだけは、うそだといいたくない。だから、言いたければ言えればいい。もう、俺はD組で受け入れられなくなる覚悟はしているから。杉浦さんが正しいと思ったことを、すればいい。俺はそれをすべて受け入れるから」

「そうなの、わかったわ。それならば、あとは私が正しいと思うことをするわ。ごめんなさいね」

やわらかい笑顔で杉浦加奈子は恋人のもとへかけていった。バラック屋根の、体育道具をまとめた小屋で上総はしばらく座り込んでいた。

これからどうなるのかわからなかった。

誰もいなくなった後、何を感じていたのか、それすら覚えていなかった。

表に出た時、今度は清坂美里がしゃがみこんでいるのを見つけてしまった。

万事休す、の意味が、初めて分かったような気がした。

——自分がすべて悪いんだ。

——俺が結局、青大附中の評議委員になれる器じゃないってことを隠していたから、こういう結末になってしまったんだ。

——結局自分が悪いんだ。人が友達になろうとして気を遣ってくれたことすら、理解できない俺がばかなんだ。すべては俺の感じ方が狂っているせいなんだ。

——それでいて謝れない情けない人間なんだ。自分が間違っていることを認められないくせに、杉浦さんが言うのが正しいと、わかっているくせに。

「立村くん、加奈子ちゃんに振られちゃったね」

杉浦加奈子を追い掛け回していたように見えたのだろう。それでもかまわなかった。

自分が物笑いにされてばかりいた泣き虫だったことを知られるよりは、杉本加奈子に惚れぬい

て追い掛け回している情けない奴の方が、ずっと救われていた。

本当は頭を下げれば一番よかったのかもしれない。

もしくは本当のことを貴史や美里に打ち明けて、協力を頼めばよかったのかもしれない。

やっと青大附中の評議委員として認められ、男子からは純粋な信頼をもらい、いじめられるなんて縁のない世界に入ることができたのに。

泣き虫でちょっとしたことで落ち込み、口が利けなくなってしまい、唇をかみ締める小学生だった自分を知られたらどうなることだろう。

想像するのも怖かった。

美里も貴史も変わることなく、上総を仲間として認めてくれていたのが救いだった。

それから一週間後。

覚悟していた噂が流れてきた。

「立村くんが杉浦さんに告白して、振られたのに、いまだに追いかけてきて加奈子ちゃん悩んでしまっているらしいよ」

C組経由でD組に流れてきた情報だった。

女子が心なしかよそよそしくなったのは感じた。杉浦も表面上は穏やかに接してくれている。でも、一時期は

「立村くんってやっぱりよくわからない人よね。少し異常なんじゃない？ 女子を追いかけてまわすなんて」

と聞こえよがしに笑われた。

評議委員会の時にも先輩達には

「お前、いきなり目覚めるのはいいが、相手もいることだからもう少し気を使えよとどやされる始末だった。

そんな中、本条だけは何も言わなかった。

黙って評議委員会に関する説明をこんこんとしてくれるだけだった。

きっと、本条先輩も知っているに違いない。心密かにあきれているのだろう。

一度植え付けられたイメージを覆すには、人一倍の努力が必要だと、自分でも覚悟していた。

徹底して本条に教えを請い、今以上の自分になれるよう、上総は本条先輩にひっぱられるまま『ビデオ演劇忠臣蔵』に打ち込んでいた。あれだけ演劇関係にかかわりたくない、言い張っていたくせにと、周りではささやかれ、笑われた。でも本条に認められるためだったら、奇声を上げて松の廊下で吉良を追い掛け回すことくらい、なんでもないことだった。

「あれだけ立村くんいやがっていたくせに、いい演技していたよね。浅野匠之頭役、本気で松の廊下、切りつけ追いかけていたよね。吉良役の結城先輩も思わず引いていたよ」

ビデオが出来上がった後、D組を始めとする女子たちからはからかい調子の感想を口にした。何も言わず、黙っていた。

自分の汚名を晴らすために、あと何ができるのだろう。

そればかりずっと考えていた。

クラスの連中があえて『杉浦さんとのこと』を突っ込もうとしなかったのは、それゆえ不思議なことだった。

。いつその話題が出てくるのだろう、いつ、物笑いにされるのだろう、そればかりが怖くて、自然と無口になっていった。

無意識なのか意識的なのか、貴史がうまくフォローしてくれていた。

「な、立村もそう思うだろ？ ポーカーフェイスしてねえで、少しなんとか言えよな」

「ほら、黙ってても立村の言いたいことは大体わかるよな」

その時はうっとおしい以外の何者でもなかった。

杉浦さん疑惑が出てきてもおかしくない宿泊研修・夜の話題に、大抵の連中は上総に、

「お前は清坂だろ」

「立村、清坂に惚れているだろ」

とつつこみを入れてきたことすら、いらだたしい以外何も感じなかった。

——どうして俺はそんなことに気付かなかったんだろう。

——南雲をはじめみんなが俺の味方だって伝えようとしてくれたのに。

——ただ知らない顔をして俺は軽蔑のまなざしを向けてきたわけなんだ。

——恋愛ざたに熱を上げる物好きな奴らだと思い込んできたんだ。

——最低だ、俺なんか認められる価値なんてない。

「杉浦さんとのことは、大嘘だって分かっているよ。立村が惚れているのは清坂さんなんだろ」という長い文章の略であることに、昨日まで気付かなかった。

水を汲み薬を飲んだ。

効くまでには時間がかかりそうだった。

何度か電話がかかってきたのは覚えている。なかなか起き上がれずそのままにしていたら、父が慌てて受話器を取っていた。深夜、台所で冷えた麦茶をがぶ飲みしていたところを見られたらしい。

目が覚めた時、枕もとにはみかんジュースの瓶入りがすたとんと置かれていた。

コップも並んでいる。

なんとか、明日は学校に行けそうだった。

——でもどんな顔していけばいいんだ？

天然果汁百パーセントのみかんジュースは、思った以上にすっぱかった。

金曜日 おひろめ

まだ身体のだるさは残っていたけれど、シャワーを浴びて寝臭さを消し、上総は自転車に乗った。乗ってしまうと後は楽だった。まだ夏の匂いが薄い空気がおいしかった。品山を出て青潟駅を通りぬけ学校に到着した。大急ぎで教室に向かった。

「あれ、立村、昨日どうしたのよ。知恵熱でも出したの？」

隣の席でこずえがにやにやしなながら上総を迎えた。手招きする。

「何が知恵熱だって。去年と同じパターン。死ぬかと思った」

「でも今回は一日で復活してきたじゃない。あんたも大人になったねえ」

「頼むからその言い方はやめてほしい」

さて、何をつっこまれるだろう。上総は気持ちを臨戦体制に切り替え、朝自習用のプリントを学習委員からもらった。まだ貴史、美里は到着していないいらしかった。あの二人はぎりぎりなのだ。一緒に来るが多かった。近いとかえって遅刻しやすいとはよく言うものだ。

「そういえば、さっき一年の杉本さんがあんたを探しに来ていたよ。あの子も早いよね。『立村先輩いませんか』って。評議委員の関係なんでしょ」

「頼むからそれを最初に言ってほしかった」

杉本梨南、いったい何の用だろう。

「確かこの辺に住んでいるんだよね」

「よく知っているなあ」

上総はプリントを置きっぱなしにして立ち上がった。一年の教室に行くつもりだった。こずえは引き止めるように袖を引いた。

「いやね、伝言して帰っちゃったよ。なんかさ、今日の評議委員会の反省点でね、自分なりにまとめたレポートを持ってきましたから立村先輩に渡して欲しいって。『先輩』だってさ。立村先輩だって、笑っちゃうよね」

「じゃあ今度から、『古川先輩』と呼んでやろうか」

「私は『お姉さま』と呼んでもらわなくっちゃ」

「しゃれにならないよ」

杉本梨南が持ってきたというレポート用紙二枚に目を通し、ところどころチェックをした後、上総はすぐにしまい込んだ。別に特別な内容だったわけではない。反省点を箇条書きにして、わかりやすくまとめてあるだけだった。杉本梨南としてはどうしても気になったのだろう。別に無理しなくてもいいのにとする一方、自分が彼女の立場だったとしたら同じようにしただろうという気もした。

——杉本、本当に生真面目だよな。

——一生懸命だから、俺とかだとどうしても手伝ってやりたくなるんだけどな。

——どうして一年の男子連中はああも嫌うんだ？

——世の中はわからないよな。

「なにがわからないのよ」

慌てて上総は取り繕った。

「いや、さ、杉本がどうしてあそこまで一年男子に嫌われるのかななってことさ。古川さんはどう思う？ 俺からすると、あれだけ真面目な一年って珍しいと思うんだけどな」

「仕事はきちんとするし、ひたむきだし、と立村は言いたいんだね」

「そう、手抜きしないし、とにかく一生懸命なんだよな。男子とか女子とか関係なく、ああいうタイプの人はずっと誉められていいと思うんだ」

こずえはしばらく人差し指のつめをかみながら考えていた様子だったが、

「わかった。あの胸にひかれたんでしょ」

「え？」

「絶対、杉本さん、Bカップ以上のブラつけているよね」

「何、言っている？」

「やだなあ、立村、あんたも気が付かないとは言わせないよ。先週の金曜日、だいたい今くらいの時間に杉本さん呼びつけて話していたことあったでしょう。あの時の目、杉本さんの谷間に行っていたの、見ていたんだからね。夏服になったばかりだったし、気持ちもわからないことないなあ、とは思っていたんだけどね」

ため息をついて言い返した。

「古川さん、今非常に失礼なこと言っているって、気付いていないだろ」

「自覚がない分、やっかいよね。ほら、朝自習のプリント落ちてているよ。はい」 無意識で落としてしまったらしい。慌てて拾った。

「でもしょうがないよね、男子はそういうのが定めだって、この前の保健体育でもならったからね。十四才の男子は毎日がそのことで頭いっぱいだっていうしね」

「すべての十四才がそういうこと考えているとは限らないだろ」

言い返すのもばかばかしくなり、上総はざっと朝自習のプリントを見直した。社会の年号暗記問題だった。

「ちなみにね、それ、美里にも見られていたってことを教えてあげるね」

「そりゃそうだろう。杉本が来た時、一緒に清坂氏もいたんだ。評議委員会の話なんだから、一緒に話をすすめるんだから。果たして俺が杉本のことをじろじろ見ていたかどうかまで、確認はしていないけどさ」

「まったく、あんたってばかだねえ、お姉さんは悲しくなるわ」

出た。こずえの十八番だ。上総は黙って次の出方を待った。

「あの後、美里は胸を大きくする体操ないかって話していたからね。ショックだったと思うよ」

こずえの言いかけた言葉は、すぐに遮られた。

「こずえ！ あんた何言っているのよ！ そんなこと、一言も言っていないじゃない！」

いつのまにか教室に来ていた美里が、どんと机の上に両手をついて怒鳴った。

別の場所でだべっていた貴史もきょとんとした顔で振り返った。

「言っているいいことと悪いことがあるって、わかっている？ 嘘ばかり言わないでよ！」

本気で憤っているらしい。この前、茶室で「付き合っている奴いるのか」と聞いた時と同じくらい、腹を立てているらしかった。

——古川さん、あやまれればいいのに。そう言ってやりたかった。

相手方のこずえは冷静沈着だった。

「嘘じゃないよ、私、ちゃんとあの後、先輩たちから『バストアップ運動』について聞いて、教えたじゃない」

「なんでこんなところで言わなくちゃいけないのよ！」

上総が側にいることを全く意識していないようすだった。

「だって、美里が落ち込んでいたのって、先週の金曜日、朝だったじゃないのよ。なんでかなって思ったら、美里ってば真剣に『胸が大きくなるにはどうすればいいのかな』とか言うんだもの、なんかあるとは思ったけどね」

「変なことばかり言うのはやめてよね！」

「美里だっていつも言っていることじゃない、いまさら知らないふりしたってね。だって、あの時の美里、すごく怖い顔していたよ」

「あの時っていつよ！」

「杉本さんが立村の机にかがみこむようにして、話を聞いていた時よ。立村が座ったままだったから、もろ、顔にあの大きな胸がぶらぶらしていたじゃない。しかもあの子、ノーブラだったからね。気付いていたでしょ、立村」

「んなこと、知るかよ」

なんだかこずえと美里の口論になりつつある。杉本梨南の谷間を見ていた記憶は全く残っていなかった。なぜそんな話で二人が喧嘩しはじめるのかがわからない。上総は黙ることを選択するしかなかった。

「そんなところ見ているのは、こずえだけに決まっているじゃない！」

だんだん美里の口調に悲鳴じみたものが混じってきた。こずえは気付いていないのだろうが、隣で聞いている上総にはぴんときた。これは泣き出す前の、微妙なサインだった。しゃべりつづけているうちに、小さく「き」という声が混じりはじめると、かなり危ない。

——大丈夫か、清坂氏。

こずえの冷静な言葉に、美里がどんどん挑発されてしまい、かっとなって支離滅裂に叫んでいる様子。貴史の姿を探した。羽飛貴史はげんそうにこちらの方を見ていたが、入ろうとはしなかった。女子同士の喧嘩に割り込んだらろくなことがおこらないとわかっているからだろう。

果たして美里が、先週の金曜日に上総と杉本梨南との語り合いを見て、なにかショックを受け

たのかどうかはわからない。また、胸の大きさにショックを受けて、自分もがんばって大きくしようと思ったのかどうかもわからない。ただ、いつも見ている美里の様子とは異なっていた。

上総の方を一切見ないで、こずえだけをじっとにらみつけるように抗議している。

——これは、まずい。

——完全に、清坂氏、理性が飛んでいる。

——でもきっかけは、俺なんだよな。

——そんなことしていなくても、やはり、まずいよな。

頭の中で言葉が飛び交い、右往左往している。

「あの、いいか」

息をひとつ吸い、上総は古川こずえに声を掛けた。美里の方は見ないままにした。

「なによ、今美里と私、雌雄を決する戦いしているんだから」

「結局、何が原因なんだ？」

「あんたが杉本さんの胸の谷間に見とれてなかったらよかったのよ。全くすげべなんだから」

「その記憶って全くないんだけどさ。もし、そういう風に見えていたら、やっぱり俺が悪いんだよな」

「別に、あんたが悪いとは言わないわよ。自然な十四才の反応なんだから」

「悪い、俺はまだ十三歳のままだ。九月が誕生日だからさ」

少しでも空気を和らげるべく、使いたくなかった誕生月を持ち出した。これでまた弟扱いされてしまうが、しかたない。

「そうだっけ？ そうかそうか、あんたは弟分だもんね」

「で、清坂氏はなんで怒っている？」

「そんなの、なんで立村くんまで聞かなくちゃいけないのよ！」

「あの、さ、つまり」

息を吸い込んで、ひいふうみいと心で唱えた。

「俺と、清坂氏と、付き合っているから、もしそういうことが原因だったら、あやまっておいた方がいいかな、と思ったんだ」

「え？ 立村、今、何て言った？」

こずえがすっとんきょうな声を上げた。

「だからつまり、清坂氏と俺は、付き合っているからさ」

表情だけはなんとか自然なままに保ったつもりでいた。声も静かに波立たせずにつぶやいたつもりだった。目線もおだやかに、こずえと美里に向けたつもりだった。

すべては『つもり』だったけれど、どういう風に見えているのかはわからない。「付き合っているって、あんたたち、いつから？」

「たぶん、先週の金曜日から」

美里の顔が真っ赤に染まっていくのに気付いたのはその後だった。頬が紅潮する瞬間というのを、上総は初めて目の当たりにした。まずいことをやってしまったと後悔する間もなく、美里はすっときびすを返して自分の席に走っていった。ばたんと椅子をひいて座り、ぐっとうつむいた。次の授業、歴史の教科書を取り出して開き、じっと見入っていた。

「ねえ、なによ、美里、どういうことなの？」

大きい声でこずえが尋ねるが、一切無視。美里は唇をかみ締め、一心不乱に歴史の教科書を読みふけていた。

はたして羽飛は、と貴史の姿を探すと、顔を露骨にしかめて上総に、人差し指を立てて口に当てた。

「それ以上言うな、ややこやしくなる」という合図なのだろうか。素直に上総は従った。

あれだけ大きい声でしゃべっていたのに、なぜかクラスの連中は和やかなままだったのはなぜだろう。上総にもわからなかった。

「おはよう、りっちゃん」

後ろから声をかけられ、上総は振り向いた。後ろの席にいる南雲がぎりぎりで飛び込んできたようだった。遅刻すれすれというのが、いかにも規律委員らしくない。

「なんだか妙な雰囲気だなあ」

「やはりわかるか」

本条先輩からもらった盗み撮りテープの内容を聞いているから、南雲がどう考え、どう感じているかはおぼろげに想像ついた。でもまだ、そのことについて話してはいなかった。照れも残っていた。

南雲も少しぎこちないものの、顔だけはからりとしたままで、

「おととい、本条さんと話したんだろ」

「一応、全部、聞いた」

テープの存在を知らない可能性もある。上総はあいまいに答えた。

「どういうこと聞いた？」

おそらく南雲も、自分が話したことをすべて上総に伝えられたとは思っていないのだろう。盗み撮りされたこと自体知らないのかもしれない。短く答えた。

「つまり、俺がこのクラスにいても、かまわないってことかな」

目を見て答えられず、うつむき加減になりながら、

「なぐちゃん、ありがとう」

ひよんな拍子で口に出た。南雲のことを『なぐちゃん』とは、一度冗談交じりで言ったことがあったけれども、意識して言葉にしたのは初めてだった。下の名前は『秋世』と書いて『しゅうせい』と読む。自分の名前を呼ばれるのは好きじゃない上総は、あえて、『りっちゃん』に似た呼び方を選んでいった。

予想に反して、南雲は何も答えなかった。

じっと上総を見つめて、うなずいた。

貴史や美里の言葉とは全く違った、やわらかいものが伝わってきた。

すべての授業が終わるまでの間、上総は南雲と洋楽ベストテンの傾向について語ったり、菱本先生にまた呼び出されて『無断欠席』について叱られたり、杉本加奈子から微妙な視線を送られて考え込んだり、気持ちの中では忙しく過ごしていた。

あえて、美里と貴史には声をかけなかった。貴史がたまたま、一年生の教室に用事があったよう出かけていた、というのもあった。たぶん、この前の金曜日に告白されたという一年生についてのことだろう。上総も詳しいことは聞いていなかった。無理やり聞く必要もないと思っていた。

美里の方をなかなか見ることができなかった。

土曜日に美里は

「しばらく黙っていたほうがいいな」

と話していた。

隠す必要はないけれども、言いふらす必要もないと。

本当は上総の内気な性格を知っていたから気を遣ってくれたというのに、結局は自分の方からさげ外してしまった。上総としては、こずえとの喧嘩をうまく止めたかっただけだったし、それ以上に美里の気持ちがかなり動揺しているのを感じてしまい、とにかくなんとかしてやりたかった。でも、見事に裏目にでてしまったようだった。

「立村、美里に声かけてやりなよ」

帰りの会でこずえがささやいた。

「杉本さんの胸にぼーとしていたのは別にいいけどさ、付き合っていることを言い出したのはあんたなんだからさ。それくらいの責任は取りなよ」

「だから何が責任だよ」

「胸が小さくても好きだって言ってやりなさいよ」

「気にしているのは古川さんのほうだろ。よくそんなところ見ているよな」

放課後は評議委員会だった。隣同士に座る。いやおうなしに隣り合うことになる。気持ちは重たいけれども、なんとかなるさと心につぶやく。

「それにしてもね、立村、あんたの方からとうとう言うとはね。お姉さんは安心したわよ。弟よ」

ふっと上総も言い返した。

「お姉さん、今度はあなたの現実問題について考えた方がいいんじゃないですか」

やんちゃな言葉を口にする寸前で止めた。

——まさか羽飛が一年生の女子と付き合うかもしれないってことを、ずっと片思いしている古川さんが知ったら、冷静でいられるわけじゃないか。そこまで俺は汚いことをしたくない。真実を教えてやるのがいいと、南雲は言ったけれどもそれもよしあしだよ。

掃除が終わった後、美里を探したがすでに、教室を移動してしまったようだった。いつもだったら

「先に行くね！」

と声を掛けてくれるというのに。相当ショックだったのかもしれない。だんだん不安が募ってきた。でも顔には出たくなくて気ままに南雲と話をしていた。委員会関係の話がほとんどで、テープに録音されていたようなことは出てこなかった。

「じゃあ、これから評議があるから」

「わかった、また明日な」

南雲がいなくなった後、教室には誰もいなくなった。羽飛が戻ってきたのは南雲とすれ違っていた。軽く「おつかれ」と交わす言葉が耳に入った。

自分が南雲とちょくちょく話をしていること、面白くないのかもしれない。貴史は軽く手を上げて、上総の隣に立ち、窓を見下ろした。

「これから委員会だろ」

「そう。評議委員会」

短く答え、上総も窓を見下ろした。中庭には一年の女子がたむろしてきゃいきゃいと花を摘んでいた。もちろん雑草のあかつめくさや露草ばかりだった。二年の女子とは異なった嬌声が、幼く聞こえて思わず上総は耳を澄ませた。貴史がぼつりつつぶやいた。

「俺たちも年をとったよな」

「確かに」

「なんだか一年前とは思えないよな」

「全くだよな」

ふけた会話を交わした後、時計を確認した。三時半にそろそろ差し掛かる頃だった。

まずい、そろそろ評議委員会の開始時刻だ。

三年A組の教室に集合しなくてはならない。

本条先輩にカセットレコーダーを返さなくてはならないし、夏休み合宿についての話し合いもしなくてはならない。

上総のしぐさに貴史も気がついたらしく、窓をゆっくりと閉めた。

「もう行くんだろ」

「ああ、なんだか気が重いな」

ふふっとに貴史は笑い、両手を上げてバンザイした。

「ははあ、立村、お前美里に嫌われたと思っているだろ。今朝の騒ぎでさ」

「そんなの知るかよ」

「なあに、あいつ凶星指されてパニックになってしまっただけだ。安心しろよ」

「安心するもなにも」

言いかけた上総を押しとどめるように、

「一年の女子には手加減しろよ。俺がわかるのはそのくらいだ」

——一年の女子って、いったい誰だろう。

——杉本のことか。

考えがまとまらぬうちに貴史は威勢良く教室を出て行ってしまった。上総も急がなくてはならなかった。すでに一分経過している。入っていったらたぶん、本条評議委員長にどやされるだろう。上総は窓に鍵をかけたのち、急ぎ早に廊下を走った。

思ったとおりだった。時間厳守で始まっていた評議委員会。上総が到着した時には壇上の本条先輩から物言わずにチョークを投げつけられた。ちびたまるっこいものだったからぶつかってもたいした事はないのだろうが、うまく避けられた。目で軽くあやまっておいて、すぐに二年生の席についた。

隣にはいつものように美里がノートを取っていた。評議委員会ノートは大抵美里が筆記してくれるものだった。一応上総もメモは取る。ただ取り捨て選択がうまく行かず、『字だけはきれいなのだが、内容がわかりづらい』状態になってしまう。その点美里は、わかりやすくポイントを押さえてくれるので、非常に助かった。

「どのくらい、進んでいる？」

「今、始まったばかりだよ」

短く答え、美里はちらっと上総に目を走らせ、すぐにそらせた。

やはり、なんだか、妙だった。

でもこれ以上私語したら、今度は本条先輩から直接長いチョークが飛んでくるだろう。さすがにそれは避けたかった。本日のテーマ『七月末の評議委員会合宿』について、本条評議委員長の発言をじっくりと聞いた。どうせ、ある程度進んだら、呼び出されて黒板に書き込みをすることになるのだろう。

まださほど、合宿についての予定は決まっていないうで、ざっと説明をただけにとどまり、本日の評議委員会はお開きとなった。杉本梨南が苦勞してまとめたらしい『一年学年集会』のレポートを本条に渡すため腰を浮かせた。と同時にいきなり後ろから腕を捕まれ引っ張られた。

A組、C組の男子評議委員である。

「あ、の、さ、立村。ちょっと来いよ」

「どうした？」

言われるがままに後ろに行くと、今度はB組の奴までいた。にやにやして、取り囲み、でも声は潜めて。

「とうとう、なんだろ？」

「何がだよ」

「聞いたもんな。あのことをさ」

「だからなんだよ、わかりづらいな」

「よくぞ落としたりよな」

「しつこい、何がなんだよ」

気だるい感じで答え、本条先輩の姿を探した。まだ教壇の上で三年生同士、何か話している。

いるうちに渡さねば。

「しかし、立村も長かったもんなあ、報われない時代がさ」

A組評議委員は、わざとらしくため息をした後、ぽんと肩を叩いた。

「ほんとほんと。切腹したい気持ちだったのは、よおくわかるぞ。浅野匠之頭」

B組評議委員が続ける。

「でもなあ、やっと、お前も名誉回復できるな。よかったよかった」

なにやら、祝福されているらしい。戸惑いつつも上総はもう一度尋ねた。

「だから、お前ら何を言いたいんだ？ 持って回った言い方しないではっきり言えよ」

どつぼにはまったと気付いたのは次の瞬間。遅すぎた。

「いいのか？はっきり言って」

「とにかくしばらくは新婚気分を味わいなってな」

「二年評議の公認カップル、とうとう誕生！とうとう来る時が来たって、感じだなあ！」

もう、言葉の響きはひそやかなものではなかった。たぶん他の学年にも聞こえただろう。ぽんぽんぽんと三人に、頭や肩背中を叩かれながら、上総はしばらくふらついていて、逃げるのもみっともないし、否定することもできない。怒るのもなんか変だ。どう振舞っていいのか、どう言い返せばいいのか、言葉が見つからず同じことばかりつぶやいていた。

「だから、そんな、大それたことじゃないってさ」

しばらく男子連中にやいのやいの言われた。一年生はひそひそとささやき、三年生は納得顔でうなずいていた。いつのまにか、情報は評議委員全員に広まっていたらしい。たぶん、上総の休んでいる間、本条先輩が誰かに話したのだろう。それとも金曜の朝、上総が言った言葉を他組の連中が聞きつけ、広めたのかもしれない。とにかく、『立村上総と清坂美里は付き合っている』という事実が伝わっていることは確かだった。

自分でばらしてしまったのだから、こうなるのはわかっていた。

もっと、笑われるだろうと思っていた。

なのに、なぜかみな、冷静に受け止めてくれている。

「あとで、どういう感じで付き合いかけたのか、言えよ」

「そういうんじゃないってさ」

だんだん教室から一人、二人帰っていく中、ずっと待っている女子がいた。

美里と、杉本梨南だった。

ずっと椅子に座ったまま美里は本を読んでいた。教科書ではなかった。文庫本だから何なのかわからなかった。側によって声をかけるつもりだったが、側でじっと待ちつづけている杉本の方をまず優先した。

「杉本、朝もらったレポート、良かったよ。本当は本条先輩に渡そうと思っていたんだけどさ。明日、見せるよ。やはり、杉本は頭が切れるよな。うらやましい」

お下げ髪をぷらんとぶらさげ、大きな瞳をきゅっと絞り込み、にこりともせずに杉本は答えた

「ありがとうございます。私、どうしても書きたかったんです」

「わかっているよ。杉本が一生懸命やっているってことは、俺もよくわかっている」

いつのまにか自分が笑顔でいることに気づき、上総は戸惑った。いつもそうだった。杉本梨南に話しかける時にはいつも、にこやかになってしまう自分がいた。本条が言うとおりに、ひいきしていると思われても仕方のないことだろう。でも上総が自分に素直になると、どうしても杉本に対してのみ、かばってやりたくなるし、誉めてやりたくなる。これは好きとか嫌いとか、付き合いたいとかそういうものではなく、ごくごく自然なものだった。笑顔を見るとほっとするとか、そういうのではない。いつもぶすつとした顔で、にらみつけるように話す杉本のまなざしは、確かに怖い。でも、その奥で、上総にしかわからない不安な気持ちが見え隠れする。絶対にうまくやらなくちゃ、絶対にこの人には認められなくちゃ、そう必死に、あがいている姿が見える。

かつての自分を見ているようだった。

小学校時代のいじめられた記憶を、打ち消そうとしてあがく、一年生の頃の上総そっくりだった。

古川こずえは上総に

「あの胸にぼーっとしているんでしょう」

と言ったけれども、それだけは断固として抗議したい。杉本がどれだけ、目立たないようにかがまないように、猫背で歩く癖があるのにだいぶ前から気付いていた。まるで自分が、クラスから浮かないように、いろいろなグループの連中とうまく付き合っているようだった。

杉本が男子だったら、別だっただろう。

自分に似た奴を好きになんてなれなかつただろう。

でも杉本梨南は女子だった。あまりにも不器用な一年生だった。

同じ辛い思いを少しでも、わかってやりたい。

でも、この時だけはもうひとつ、大切なことが残っている。

「あのさ、杉本。明日の朝、詳しいこと説明するから今日は早く帰った方がいいよ」

はっとした表情で、杉本梨南は上総を見返した。

「私、家近いから、遅くなっても平気です」

「そうか、でも、今日だけは、どうしてもだめなんだ」

上総はきっぱりと告げた。

「今日は清坂さんと一緒に、用事があるんだ」

坐っている美里に、聞こえるよう、ゆっくりと告げた。

「そうなんですか。では明日、立村先輩の教室に行きます」

「待っているから」

よくわけのわからなさそうな顔で、杉本梨南は一礼すると、美里の方にも小さく会釈し、教室を出て行った。

ドアが閉まり、杉本梨南の足音が消えたところで、上総は美里の隣に戻った。身動きひとつせず、美里はひたすら本を読んでいた。聞いていたのかどうかわからなかった。

「あのさ、清坂氏」

「いいよ、先に帰って」

「まだ、怒っているのか」

静かに上総は声をかけた。波打たずに、聞こえた。

「怒ってなんか、ないけど」

「だったら、帰ろうか」

しゃがみこみ、美里の坐っている机にひじをついた。下から見上げる感じで美里の顔を覗いた。

「やだ、見ないでよ」

「やはり怒っているんだな。悪かった。俺が変なこと言わないほうがよかったのかな」

「そんなことはないよ、立村くん。どうしたの。なんだか違うよ、今日は」

「お互い様だろう」

何の本読んでいるのか、と、カバーから透ける題名を読み取ろうと覗いた。露骨にそうしたわけではなかった。でも美里にとっては不愉快だったのだろう。さっと綴じた。

「変なことしないでよ、立村くん、何か熱で頭おかしくなっちゃったんじゃないの。もう」

「おかしくなったのか、どうなのかわからないな。三十九度くらいまで上がった」

何度かくわえて計った体温計は、午後までなかなか下がらなかったことを思い出した。

「うそ、三十九度ったら、起きてられないよ」

「いつもそのくらいなんだ。去年の今ごろもそうだった」

美里はおそろおそろといった風に、上総のひたいを見つめた。

「なら、今は、平気なの？ 具合悪くないの」

「夕方には下がった。だから、学校にも平気で来られたんだ」

わざとはっきり、美里の顔を見つめながら答えた。

美里の表情が刻々と変わっていくのを知るのは正直なところ怖かったけれども耐えた。いつも以上にやわらかく答える努力をした。

「やっぱり、立村くん、まだ熱出しているんだよ。きっと」

本をかばんにしまい込もうとした拍子に、ちらりと表紙がはがれた。美里は気付いていないようすで、すぐにカバーをかけなおし、中に入れた。古本なのだろう。薄汚れた文庫本の表紙に印刷された題名を、上総は読む前に気付いた。

「あのさ、今の本って」

口に出そうとして、すぐに飲み込んだ。

「なんでもないよ、なんでもないったら」

「それならいいんだ」

窓を締めようと、上総は背を向けた。

——フィッツジェラルドか。

聞こえないように、自分の中でつぶやいた。

『華麗なるギャツビー』 邦題がそうになっていた出版社もあったはずだった。何作か訳者違いの本を読み比べていた。美里が持っていた文庫本が一番よく出回っているタイプのものだった。

愛読書だと知っていたのだろうか。

青大附中の面接試験で、上総は好きな本について何でも答えるようにいわれ、『グレート・ギャツビー』への思い入れを語り尽くした。たぶんあれで受かったのだろう。時間オーバーするくらいにしゃべりつづけたことを覚えている。

愛した女デイジーを取り戻すため、毎晩派手なパーティーを開きつづけ、やがて成功するギャツビー。しかし最後は裏切られる悲劇について、ありふれた感想を語った。

貴史には話したことがあるかもしれない。聞いたのだろうか。

決して誰もが好きになれそうな小説ではないのに。

好みの作品じゃなさそうなのに。

言えない言葉が、次から次へと咽の奥にたまりすとんとみぞおちに落ちていった。

椅子ががらっと鳴った。振り返ると美里が、準備を終えて上総を待っていた。

「じゃあ、行こうか」

硬い表情をしたまま、美里は頷いた。思い切ったように大きく息を吸い込み

、

「立村くん、あのね」

はたと言葉を切った。

「どうした？」

「みんな、もう、気付いていたんだよ。ごめんね。私もわかっていたのに」

「え？ 気付いているって」

「昨日の段階で、D組の男子、みんな知っていたって。でも」

堰を切ったように美里は言葉をついだ。

「みんな、立村くんが言うまで、知らないふりしてあげようって、決めていたんだって。貴史が、さっき、そう言っていた。女子にも内緒にしてあげようって、言っていた。いやな思いしないようになって、男子がみんな、決めていたんだって」

南雲発言のテープから前もって聞いていたことだった。上総は驚かず相槌を打った。

「立村くんが加奈子ちゃんに告白なんてしてないって、私、知っていたよ」

「え？」

「去年の冬、噂立つ前から知っていたよ。だって私、杉浦加奈子ちゃんに確認したんだもの。加奈子ちゃん、立村くんにつき合い、かけられてないって言っていたもの。どうしてあんな噂が立ったのかわかんないけど、今ならどうでもいいよね。だって、わかっている奴はみんな、わかっているもん。D組の男子も、貴史も」

私も、とは言わなかった。

「だから、無理しなくていいんだから。D組、私と貴史と、男子の連中だけはみんな、立村くんの味方なんだから。立村くんが一生懸命やっているってことは、みんなすっごく、よくわかっているの」

言葉をさしはさもうとするが、美里は首を軽く振って続けた。

「さっき、杉本さんに話していたでしょ。あの子、一生懸命やっているっていつも立村くん言っているよね。私もそう思うよ。だから、先週の金曜日、一生懸命杉本さんに教えていたんだって、わかっている。こずえが言ったみたいに、変なところ見ていたなんて、思っていないから」

「ああ、今朝のことか。あれは失礼な話だよな」

何気なく美里の胸元に目が行ったがすぐに逸らした。

「私、言いたいのはこれだけ」

両手をぎゅっと握り締めたまま、美里はゆっくりと、上総の瞳を捕らえたまま。

「杉本さんの面倒を見てあげている立村くんと、同じ目をしているの。きっと、私、立村くん」

ころがりおちた言葉を拾い上げようとするように、ちらっと下に目を走らせた。無理して笑顔を作ろうとしている。肩で息をしている。

「じゃあ、また明日ね」

急ぎ早にドアを開けて美里は帰ろうとした。ノブに手がかかる。

——好きなんだろう、付き合っちゃえよ。

——お前は清坂に惚れているんだろ。

——見るからにばれればれじゃないかよ。

D組男子たちがぶつける言葉に戸惑っていた。

貴史、南雲の言葉と、自分が感じている美里への思い。

今の今まで繋がらなかった。

そばにいて真っ赤になってしまうとか、夢に見てしまうとか、そういう感情はなかった。茶道室で一緒にいた時も、ふたりっきりでいたのに。手を触れたいとも思わなかった。

なぜだろう。

美里の言葉で硬く引き絞られた結び目が解けた。

好きとか、嫌いとか、愛しているとか、そんな言葉じゃない。

自分の味方でずっといてくれた美里を、わかってやりたい。

痛みを少しでも減らしてやりたい。

口に出せずにいる言葉を、汲み取ってやりたい。

杉本梨南に感じている感情に限りなく似ている。名前をつけられずにいた。

上総が杉本梨南に懸命に教えていた時、美里はかなりきつい目をしてにらみつけていたという。こずえはその時に「杉本さんの胸にぼーっとしていた」と決め付けた。また美里も、「胸を大きくしたい」などと口走っていたという。でも、美里が見ていたのはそんなもんじゃないだろう。

美里が言ったとおり、

「杉本さんの面倒を見てあげている立村くんと、同じ目をしているの。きっと、私、立村くん」

杉浦加奈子との告白騒ぎに巻き込まれても、散々女子からはあきれられても、美里はきっと、同じ目をして自分を見つめてくれていたのかもしれない。

D組の男子連中が早い段階で噂ががせねただと理解してくれていたこと、貴史が上総に内緒にしようと手を回してくれたこと、南雲が反発して本当のことを話してくれたこと。ありとあらゆる事が繋がっていく。

本条の言うとおりであった。

「お前、ガキだよ。ガキだから、守られているんだよ」

染み通った。

恋愛感情なんてわからない。もしかしたら清坂美里のことを好きではないのかもしれない。でも、美里の動揺した様子を見ていて、たまらなく助けてやりたい、わかってやりたい、そう感じたのは本物だった。つい、言うつもりのなかった「付き合っている」という言葉を口走ってしまったのも、美里を泣かせたくない、ただそれだけの気持ちからだった。

気付いたとたん、勝手に体が動いた。

美里を呼び止めた。

声が出た。

「それならさ、俺は、杉本よりもうすこし、清坂氏のこと、ひいきすれば、いいってことだろ」
びくりと動かなくなった美里に近寄った。

「ひいき？」

か細く、美里が答える。

「本条先輩に言われたんだ。『お前、杉本のことをひいきしているからな』ってさ」

「なあんだ。わかっているんだ」

「だったら、それ以上、ひいきすれば、いいんだよな。それが、付き合うって、ことだろう」

自分で思いつくまま、とりとめなく話しているのが情けない。必死におだやかな口調をつくらうけれど、どうしても早口になってしまう。

「それなら、俺もできるからさ」

うつむいたまま、美里は頷いた。言葉を発さなかった。怒った肩が少し下がりがげんだった。身を硬くしているようす。右手がノブにかかったままだった。

——『付き合う』という言葉、方法はわからないけれど。

——D組の男子たち、貴史、南雲たちが俺にしてくれたように。

——清坂氏の味方であることなら、できるはず。

上総はためらいがちに、重ねた指先でそのノブをひねった。

自然と指先が触れ合った。

伝わってきたのはしめった温もりだった。

水無月の夕立

<http://p.booklog.jp/book/77964>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77964>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77964>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ